

序

余は近時の書生が、學校教育にのみ重きを置きて、自から教育する事の、更に大切なる所以を解せざるを嘆ずるもの也。本書は即ち其自から教育する所以の利益、効果、方法を講じて、學校に入れると否とを問はず、苟も學問に従事して身を立て世に出でんとするもの、爲に、資する所あらんとする也。獨學自修の法誠に能く之を究めば、即ち立身出世の道を得る、

蓋し易事ならずと云ふことなからん。

明治三十五年四月 著者誌

立身獨學自修策

目次

第一章 序論.....一

- (一) 人は何を以てか立つ.....一
- (二) 性格才能とは何ぞや.....三
- (三) 性格才能は修養を要す.....五
- (四) 教育の目的及必要.....八
- (五) 誰をか教育者とする.....一一
- (六) 學校教育は果して能く性格才能を造るに足るか.....一二

(七) 學校以外書物以外の大教育者とは何ぞ……………二一

第二章 獨學の必要……………二三

(一) 教育の二種類……………二三

(二) 自己教育の二類……………二六

(三) 自己教育は天然なり……………二七

(四) 自己教育の動機……………三九

(五) 興味……………四二

(六) 直接興味……………四五

(七) 間接興味……………五一

(八) 多方の興味……………五七

第三章 成効の秘訣と教育の極致……………六四

(一) 立身出世とは何ぞや……………六四

(二) 人の目的……………六七

(三) 立身出世の種類……………六九

(四) 成効の誤解……………七三

(五) 成効の秘訣……………七五

(六) 教育の極致……………七九

第四章 人物と自己教育……………八四

(一) 人物は皆自から教育す……………八四

(二) 彼等を回想せよ……………八六

第五章 自教育の方法……………一五

(一) 間斷なき注意……………一五

(二) 鋭敏なる智力……………一一九

(三) 健全温和なる感情……………一二二

(四) 強固なる意志……………一二九

(五) 自己修練の心がけ……………一三六

(六) 讀書の必要及讀本の選擇……………一四四

(七) 讀書の方法……………一五二

(八) 讀書の形式……………一五五

(九) 友人……………一五八

第六章 結論……………一六四

(一) 自教育の缺點……………一六四

(二) 其補足……………一七〇

(三) 自教育者の長所……………一七八

目次終

立身獨學自修策

第一章 序論

人は何を以てか立つ

吾人並に此世に在りては抑も何等の故なりや。請ふ先之を熟思精考せよ。醉ひたるが如くにして生活し、夢の如くにして死去す。是果して吾人の願望なるべきか。誰か之を冀はんや。然らば則ち吾人は何を以て立つべきか。吾人が世に處して

久津見 藤村 著

以て人を利し、己を益し、國家の爲にし、天下の爲にする事を得る所以のものは、即ち吾人の世に立つて、以て之に處する事を得る所以の性格才能あればならずや。小は陋巷の小賈より、大は廟堂の大臣に至るまで、苟も一藝一能あることなくして、而して、能く其の職にあることを得べきにあらず。其の性格才能小なれば、即ち其の生活小に、其の性格才能大なれば、即ち其の生活大に、人を利し、世を益する大小も、亦之に依て分かる。

凡そ英雄とし、學者とし、義人とし、傑士として、世の推尊を永久にする所の人を看よ。皆其の性格才能の超凡絶俗にして、人を利し、世を益したること大なればなり。或は之を以て、其の人の徳に歸するものあらん。然り、之を徳と云ふも、亦可なり。而して、徳は性格の一なり。性格才能の完全なるものは、智徳兼備はれるを云ふなり。然らば、則ち、人苟も此の世に出でて、以て醉生夢死の耻辱を受けざらんとすれば、則ち其の性格才能を研磨して、以て世に立たんことを欲せざるべからず。

二 性格才能とは何ぞや

或は謂ふ所の性格才能とは、如何んと問ふものあらん。余云ふ所の性格才能とは、心意と行爲との上に於て、萬事に亘れる傾向能力の總稱なり。性格とは、心意の本質の傾向を指し、才能とは、其の所作の能力を云ふ。ニエートンの引力の理法を發見せしは、科學の大才能にして、ナポレオンの百戰百勝

能く歐洲に覇たりしは、英雄の大性格によるなり。秀吉の撥亂反正、天下統一の効を奏せしは、軍國の大才能大性格にして、弘法の布教傳道、佛教を國民に擴めたりしは、宗教の大性格大才能なり、兵卒銃を執りて敵に對ひ、能くその的中を過らざるは、兵士の能にして、小賈貨を鬻ぎて客に向ひ、能くその利を得る所以のものは、小賈の才能なり。故に、性格才能の大小は、その人の大小にして、又其の性格才能は、其の人の生命なり。微と雖之なくんば、人生さす。看よ、乞食と雖、其の食を請ひ、錢を求むる所以の術なくんば、人之に錢穀を與へず。其の術の巧拙如何によりて、得る所に大小あるにあらずや。而して、其の術はこれ乞食の才能ならずや。吾人共に苟も身を立て名を揚げ、而して天下國家を益せん

と冀は、即ち此の性格才能を大にせざるべからず。性格才能大なれば、其の身を立つる大にして、その名亦大に、國家人民を益するも、亦大なればなり。然らば性格才能を大にする方法如何。

三 性格才能は修養を要す

詩人は生るゝものにして、造らるゝものにあらずとは、文學家の屢々云ふ所なり。誠にシエキスピーアは、教育に依りて造られたるにあらず。ミルトンも、亦他の隨意に製造したるものにあらず。赤人、人丸、貫之等亦自から出てたるものにして、他家の製作したるものにあらず。此の意味より云へば、英雄、豪傑、大思想家、大學者、偕ては微々たる小賈小農と

雖苟も一藝一能の他と異なる者は、多くは製造にあらずして出生なり。所謂天才は生まるるものなりとは誠に眞理なり。他人多く教へざるに、彼等自からにして性格才能の他に秀でたるものあるに至るは、珍しからざる事實なり。是に於て乎、或は性格才能も生まるゝものなるを信じて、敢て己の性格を訓練せず、才能を研磨せず、漫に天の己に性格才能を下さざるを怨むものなきにあらず。然れども、これ大なる誤謬なり。天の授けたる性格才能の萌芽は、猶植物の種子に良否あるが如く、各差等なきにあらずと雖、良種の植物も培養を怠るときは良木たることを得ざるが如く、性格才能も之を研磨修養せざれば發達せず。惡種の植物も能く之を培養すれば佳樹たることを得るが如く、天の授けたる性格才能

は庸劣と雖、其の研磨修養を怠らずんば、即ち遂に賢良たることありと云ふべし。換言すれば、賢良なる性格才能の萌芽も、能く之が成長を謀らざれば、遂に凡庸たるを免れず。凡庸なる性格才能の萌芽も、能く之を研磨養成すれば、即ち賢良たることを得べきなり。看よ、白痴の兒童も之に適當の教育を施せば、以て通常の兒童となし得べく、盲啞も之を教育すれば、字を知り、學を解するに至るを、況んや、不具の人にあらず、通常の性格才能を天授せられたるものに於てをや。若し尙之を疑ふものあらば、去て高等普通の教育を受けたる人と、否らざる尋常人とを比較せよ。其の知識の量に於て、其の品位の質に於て、到底同日の論にあらざるを知るに足らん。グラッドストーン、ヂュレリーの如き、大政治家たる性格才能

を固有したる人と雖、イトンに於て、將た「オックスホルド」に於て、他の教授を受け、將又己れ自から己を教育したることなかりせば、唯これ一個碌々たる英國民にて終りしや明なり。故に性格才能は、修養せざるべからず。修養なき性格才能は、猶研磨せざる璞の如く、培養せざる樹木の如し、皎々たる光あることなく、豊富なる果實を得ることを得ざるなり。

四 教育の目的及必要

是に於てか、通常皆教育なる哉、教育なる哉と叫べり。然り、才能を研磨し、性格を養成するは、教育を必要とするや、多言を要せざる所なり。然れども、其の謂ふ所の教育とは、如何なるものぞ、將その目的は、那邊にありや。古來教育の必要、并にそ

の目的に就て、説を立てたるもの少なからず。教育學、并に教育學の史籍を読み來れば、ソクラテス、プラト、アリストートルの古より、ズチルム、トロツェンドルフ、ラトケ、コメニース、ペスタロツヂ、ヘルバルトを経て、チラー、ヂッテス、ライン、リンドネル、ウイلمان、グッラー、フリーエーの今日に至るまで、甲唱乙和、其の説枚擧に遑まあらずと雖、要するに、教育は人の性能を開發して、其の性格才能を善良、且廣大ならしむるが爲に必要なるものとせらる。而して、其の目的、亦實にこれにあり。換言すれば、人をして人たる所以の性格才能を完全ならしむるもの、是教育の目的なり。近時國家を云々して、教育は、一に其の國家の維持と繁榮とを目的として、以て個人をその國家の目的に一致せしむるものなりとなす。

ものありと雖、これ誠に狹隘の論なり。余の信する所によれば、教育は完全なる人を造るを目的とせざるべからず。完全なる徳、完全なる智、完全なる情、更に之を約言すれば、完全なる性格才能を養成するもの、これ教育の目的なり。國民として國家の事を負擔するが如きは、即ち此の目的の中に含蓄する所なり。教育にして此の目的を遂ぐることを得んか、國民として國家の事業を負擔し、其の維持と繁榮とを全うする資格ある人を得るは、易々の事のみ。何となれば、完全なる性格才能と云へる中には、國民たる所以の資格をも含み、而して更に他の方面の智徳をも備へたるものなればなり。何を殊に教育の目的を單に國家の一點に限りて、以て狹隘の性格才能の養成に勉むべけんや。

吾人は教育に依りて、完全なる性格才能を養成せられ、個人としては、己の生活を全うし、國民としては、國家の事業を負擔し、將又世界に立つ人としては、天上天下、人として人たる所以の智徳を兼備し、以て人たるの責任を盡すものたらざるべからず。是れ己を利する所以なり。人を益する所以なり。天下に利益道德を貢獻する所以なりとす。

五 誰をか教育者とす

吾人の教育に俟つ所あるや、斯の如し。然らば、其の吾人を教育する所のものは誰れぞ。通常人の答ふる所は曰く、學校、曰く教師、これなり。此の二者、素より吾人を教育して、吾人の性格を築造し、才能を發達せしむるものなり。吾人は深く學校

と教師とに感謝せざるべからずと雖然れども此の二つの者は果して能く眞に性格才能を遺憾なく養成研磨するものなるか又此の二者の恩恵に與かることを得ざるものに對しては果して其の効能を及し得べきや請ふ能く此の二者に就て熟考する所あれ余は學校教育の未だ以てこの二事を能くせざることを知るなり。

六 學校教育は果して能く性格才能

を造るに足るか

グラットストンも、ヂスレリーも、イトン校に學べり、ナポレオンも小學に通ひ、砲兵士官の學校に入りたりき。此の点より見れば、學校教育の効は眞に能く傑人を造るに足るが如

し。然れども試みに思ひ見よ、ナポレオンと共に學びたりし砲兵士官候補生は若干なりしぞ。グラットストン、ヂスレリーと共に、イトン校の教育を受けたるものは、果して幾何なりしぞ。吾人は今其の時の學生名簿を有せざれば、其の數を詳にせずと雖、同級生の數、百以下なりきとは云ふべからず。然り而して、此の百以上の同級生は、果して悉くナポレオンと同じく將軍たり、元帥たり、將、帝王たることを得る性格才能を備へたりしか。グラットストン、ヂスレリーと同じく、大宰相となることを得る性格才能を授かり得たりしか。事實は、正に其の不能を證せるにあらずや。殊に況んや、グラットストンの「イトシ」にあるや、ホームエルを學び、其の詩篇に耽溺して、數學、科學の如きは、幾んど之を抛擲しつゝあり。後年大

藏總裁として、歳計上の知識に富み、財政に長技を振ふ人物となるが如き修養は、之を「イトン」に得たるや否やを疑はしむるものありきと云ふをや。又況んや、同じ人は「オツクスホルド」の教育を評して、「一の缺点ありとし、「余の「オツクスホルド」にあるや、こゝを去りし後、學べる事を學ぶを得ざりき」と云へるをや。是等の例は、誠に僅少なりと雖、これ明に學校教育の効能は、世人の想ふが如く、大いなるものにあらざるを證せり。更に若し尙之を疑ふものあらば、古今東西の傑人に就て、その教育を見來たれ。秀吉、家康の如き大豪傑、果して學校教育の産める所なりしか。フランクリン、リンコールンの如き大人物は、果して學校教育に依りて製造せられたりしや。例令は、微々たる人と雖も、一の性格あり、才能あるものは、

其の特色を學校教育にて造られたりと云ふことを得べきか。事實は正に之を打消すに踟躇せざるなり。學校の教育は模型的なり、平等的なり。一の標準を立て、數多の學生をこの標準に據らしむれば、足れりとなすものなり。他言を以て云へば、如何に學生の性質に注意する學校にても、普通の知識、道徳を教へ、普通の標準に達せしめんとするものに過ぎざるなり。「イトン」校の學生は、其の衣の悉く黒色なるが如く、其の心意も亦悉く幾んど同一の模型に容れんとするものなり。グラットストン、ヂズレリーの如き、特色、秀才、超凡、卓識の其の間に見はるゝは、端緒を學校教育に得て、而して、更に他に、我才能を養ふ所あればならずや。學校教育の効能や斯の如し。而して、斯の如き所以の理由は、果して何ぞ。讀者よ、更

に之に就て思考せよ。別に大いなる理由の存するあるを知らん。

學校教育の授くる所の知識道德は、總て間接的のものなり。社會の實際に活動しつゝある知識道德を、抽象概括して、或は之を教科書とし、或は之を教師の講話として、而して後、之を學生に授く。學生は實際の社會に活動する知識道德に直接するにあらずして、書物より、講義より、間接に之を覗見するのみ。活きたる知識道德に接するにあらずして、既に打殺せられて書物となり、講義となりたる死知識、死道德に接するものなり。若し幸にして其の書物が、前賢古聖の生命を宿し、活如として言々聲あり、字々血あるものならば、之に依り、吾人は大ひなる益を受けん。又幸にして其の教師が性格優

れ、技倆勝れたる人ならば、之に依りて、亦吾人は大ひに啓發せらるゝ所あらん。斯くして得たる學問の端緒は、吾人が更に別に修養を積まんとするに當りて、大ひなる力とならん。は明なり。然れども、世の多くの學校は、死したる知識道德を唯一無二の重寶として、恭しく之を傳授するに過ぎず。又其の教師の多數は、性格優れず、技倆勝れず、學生を感化するの力誠に乏くして、活動なき書物の切賣に過ぎざるなり。エマソンが學校教育の一の價值は、其の無價値なる所以を教ふるにありと云へるが如く、學校は或る度以上の價值あるものにあらざるなり。而して其の或る度と云ふも、誠に低度なるものなり。僅に字を知り、書を解し、物を云ひ、文を屬するに過ぎざるものなり。是れ以上、苟も人格と云い、品性と云い、

活きたる智識道德を備ふる人となるは、即ち學校以外書物以外の大教育者を俟たざるべからず。古今の傑人は、皆此の大教育者に依りて、養成發達したるものなり。若し尙之を疑はば、靜に諸の學校の成績に考へ見よ。グラットストンと共に、同一の「イトン」校にあり、同一の教育を受けたる生徒は、千百管ならざるべし。「オックスホルド」に於ても亦然り。若し學校教育の効に依りて、グラットストン造られたりとせば、百のグラットストンあるべかりし筈なり。然るに事實は之に反して、彼れは是唯一人のみ。他の多くは碌々たる俗輩たり。彼れが後年學ぶことを得たるものを「オックスホルド」にて學ぶことを得ざりきと云へるが如く、彼の立身は、學校教育の力よりも、彼れ自身の力に依れり。彼れ自身の教育に依れ

りと云はざるべからず。斯の如き所以のものは、學校教育の唯死したる智識道德の傳授に、忙殺せられつゝあるのみなればなり。活世界に立ちて、立身功名を肆にせんとすれば、活智識、活道德を學校以外の地、書物以外の物に、修養せざるべからず。然れども、誤解すること勿れ。斯く云ふは、總て悉く學校を無能なりと云ふものにあらず。唯其の世人の想ふが如く、万能ならざるを云ふのみ。或るものは、此の學校教育に大ひなる端緒を得て、而して、大いなる成效を得たるものあり。或るものは、又此の學校教育の爲に、耳目を開かれ、之に依りて、清選の知識を養ふに至れるものあるや明なり。余は及ぶべき次第、學校教育の効能を大ひならしめんが爲に、學校教育の方法

と其の教師との改良進歩を謀らんことを欲するものなり。然れども人が單に之のみに依りて眞に能く性格才能を修養し得て而して大人物たり大思想家たることを得べしと思ふは大いなる誤謬なり。學校教育は眞に性格才能を修養する所以の端緒として價值あるのみ。此の端緒を得たるの人更に之れ以外の大教育者に就かば蓋し其の成效や疑ひなかるべし。況んや此の端緒に就くことをだも得ざる人に於ては之れ以外の大教育者を俟たざるべからざるをや。若し夫れ此の大教育者を俟つことを知らずんば多費なる學校教育を受くるもその成效は僥倖の外甚だ少なきものならん。又之を受くることだも能くすることを得ざるものゝ如き終に何事をも成し得ずして夢死するに至らんのみ。嗚

呼、學校以外、書物以外の大教育者の効も亦偉ならずや。

七 學校以外書物以外の大教育者とは

何ぞ

此の大教育者とは誰れぞ。彼は儼然として校舎を構へざるなり。彼は端然として教場に立たざるなり。教鞭を振ひて教授せず。書物を開きて講義せず。形の學生の眼前に現はるゝにあらざるなり。聲の彼等が耳底に響けるにあらざるなり。無形無聲無爲なるが如く、無象なるが如き間にありて而して吾人の誠意熱心を以て之を迎ふるあれば直ちに吾人の上に来りて我々として教育を怠らす。若し一旦吾人之を迎ふるの誠意熱心を失はんか、忽然として去つて迹なく、而し

て吾人の教育は又俄然として弛廢せんなり此の大教育者は斯の如く其の形朦朧^模たりと雖然れども古今の英傑は皆之が爲に造られたりナポレオンも之が爲に出で秀吉も之が爲に生れグラットストンも之に依りて造られ家康も之に依りて造られデカルトの如き深遠なる哲學者も之を俟て出で徂徠の如き卓落なる學者も之を俟つて出づフランクリンの如き堅實なる人物もリンコールンの如き出色の大統領も皆之に依りて出でたるなり嗚呼この大教育者の効は愈々益々偉ならずや

然らばこの大教育者の名は何にぞ英にありては『セルフ、エヂュケーション』と云ひ又『セルフ、カルチュア』と云ひ獨にありては『セルブス、テルツェンフアング』と云ひ我國に於ては

獨學とも自修とも又自己教育とも云ふ其の必要なる所以は更に之を次章に説かん

第二章 獨學の必要

一 教育の二種類

教育なるものは之を大別して二となす一を學校教育と云ひ一を自己教育と云ふ學校教育とは凡そ教育を受くるもの、外に教育する所のものを設けて之に依りて施す所の教育を總稱す自己教育とは之に反して己れ自から己れを教育するを云ふ約言すれば獨學自修これなり抑も人の教育は此の二つのものに依りて之を完成するものなり學校教育は世の想ふが如く効能あるにあらずと雖而かも人を

して自から智識道德を啓發せしめ、且或る度まで、學生の智識道德を平均の模型に容れて鍛鑄するものなり。之以上若しくは之以外に於て、人苟も自己の特性、特技を發揮せんと欲すれば、即ち第二の自己教育に據らざるべからず。而して、此の自己の特性、特技、即ちその特殊の性格才能を發揮し得たるもの、これ大人物なり。大豪傑なり。將又一個人出色の人物なり。苟も立身出世を冀はざるものならば、已むべし。然らざるものならば、即ち單に第一の學校教育のみに安ずべきにあらざるなり。若し夫れ、之にのみ安せんか、我知る所のものは、我と同列の學生の知る所のもの、み、我爲し得る所の事も、亦我と同學の友の同じく爲し得る所ならん。例令へば、如何に高等の教育を受けたるにもせよ。同學數十の友は、皆我

と甲乙大差なき智識道德あるものならんのみ。蓋し教授は平等なり。授業固より學生の特質に斟酌すべきものなり。雖然れども、全く各箇特別なることを得べきにあらざるなり。若し唯學校教育にのみ安せんか、即ち唯或る度の模型に據りて造られたる一樣なる智識道德を得たるに過ぎず。勿論實際上にては、各人の特質、才能の長短の之に加はるあるが故に、全く同一模型に陥るることなし。雖然れども、亦唯同一の鑄形を以て造られたる鐵器の如く、その差違は微々たる點のみ。出色の點なく、特性の相異なるもの多からざるなり。斯の如くにして果して一個出色の人物たり、才能特殊の人物たることを得て、身を抽て世に立つことを得べきか。學校より出で、而かも、一個出色の人たることを得たるも

のを觀察し來れよ。學校以外、書物以外に己自から己を教育して以て己の特長を大にしたるものあるを知るに足らん。況んや學校教育を受くることを得ざるものに於てをや。己は自己自から教育して以て其の己を太にせざるべからず。學業以外、書物以外の大教育者の必要なる亦争ふべからざるなり。

二 自己教育の二類

此の大教育者は之を外に求むるに及ばずして之を内に求めざるべからず。之を人に求むべからずして之を己に求めざるべからず。學校の己を教授するの足らざるを憂へずして己の己を教育するの足らざるを憂へざるべからざるなり。

り。然りて、に於て自己教育は二つの種類に分かる。一は學校教育の補充として己自からなす所のもの、一は毫も學校教育に依らずして全く始より己自から己を教育するもの。これなり。學校教育の補充として自からその己を教育するの必要なるは既に之を説きたるが如し。而かも一方に於て不充分ながらも己を教導誘掖するものあれば即ち之をなし易きが如く全く毫も他の助を借らずして唯己一人己を教育するは頗ぶる難きが如くに想ふものあらん。然れども是認見のみ難しと云は、二者共に難くその間難易の差あることなし。易しと云は、二者共に易く其の間に甲乙あるべからざるなり。

三 自己教育は天然なり

看よ、吾人が教育を受けて發達しつゝある状態は、如何に自然にして、如何に自己的なるかを、吾人が生れて此の空気を呼吸し初てより、成長するまでの間に於て、その發達し改良進歩するは、多く他人の教導誘掖の結果なるか、反省せよ、熟思せよ、体操の教授は他人の爲す所なりと雖、我は己自身の生理的發達に依りて、その身長、体量、筋力を増加しつゝあるにあらずや、家族間の氣風、社會の習慣、風俗等より吾人の心身の上に来る所の感化は、他動的なりと雖、我は之を自己の心身の中に於て、我知らず自身に同化作用を營みて、以て自からにして我を發達改良せしむるにあらずや、知覺力、記憶力、感情並に意志の如き、學校教師はその開發を口にして、孜孜勉むる所あるに相違なしと雖、若し一點我固有の自發力

を缺きたらんか、教師千萬の努力も、寸分の効を成さざるべし。吾人能く我身を反省すれば、誰に教へられたるにあらず、又誰に問ひたるにあらずして、而かも、明瞭確實に知覺し、記憶し、感動し、實行しつゝある多くの事あるを察知し得ん。我は發達せしめじとも發達せしめんとも思惟せず、他人も同じく斯く思惟せず、又其の發達に助力も與へざるに、我が心身の多くは自からにして、發達増加するならずや、之を小兒の發達に見よ、之を少年の心意の生長に察せよ、教育の速度よりも倍加するの速度(不健康体ならざる限りは)を以て、發達進歩しつゝあるを見んなり。小兒が乳を吸ふは誰か教ふる所なるや、其の次第に巧みなるに至るは、母の教授する所なるや、彼は物を喰ふことを自からにして知るなり、彼は匍

ふことを自修するなり。立つこと、歩むことも、亦た自修によらざるはなし。是等本能的發達より、模擬的運動をなす時代に至れば、倣へよと命せざるに倣ふを常とす。態度を眞似、人事を眞似、工藝を眞似るは、これ即ち自修にあらずや。言語も自から修練するにあざれば、之を能くするに至らず。讀書も自から讀むことを習はんと欲して、之を自から修行せざれば、決して讀むことを能くすべからず。百般の學事教育、幾んど皆然り。是等の事實によりて、更に自己教育なるものは、如何なるやを案せよ。自己教育は吾人の天然なり。吾人が無意識になしつゝある所の發達成長は、皆これ自己教育なり。更に有意識の時代に移りて之を見るも、幾んど總ての教育は、或る意味に於て皆自己教育なり。獨學なりと云はざるべ

からず。唯之を特に學校教育と云ひ、自己教育と云ふ所以のものは、他力を以てする教育的機關の有無に依りて名付けたる名目上の區別のみ。例令、此の機關ありて學ぶと云ふと雖も、自己自から自己を教育せんと欲する意志あるにあらずんば、將何の効かあらん。若し夫れ、此の意志の鞏固堅忍なるものあらんか、學校教育の有無は問ふことを要せざるべし。故に自己教育を難しと云ふものは、學校教育を受くるも尙難きなり。自己自から自己を教育せんと欲せずんば、他に教育せらるゝも、其の効あることなればなり。更に吾人が發達立身の上よりして、吾人の教育を觀察し來れよ。例言へは、十二分に學校教育を受け、而して、その學校教育は、エマーソンの云ふが如く、其の無價値を教ふるものに

あらずとせんも、吾人は之れのみを以て世に立ち、社會を潤歩することを得ざるものあるを覺らん。正當の教育を受けたるものゝ多からざる我國の如きは、大學の卒業學士と云へば、一時飛鳥をも落すべき勢力あり、「ハッチェラー」の看版を擧げ來れば、幾んど功名富貴心の儘なるか如くに想像せられたる時代ありき。然れども、今日は如何ん、世界は實力の競争場となれり。特色を以て争はざるべからざる舞臺となれり。一箇何學士なる看版のみにては、未だ以て世の尊敬を買ひ、好位置を買ふことを得ざるに至れるにあらずや。大學の卒業生すら既に然り。況んや、他の學校をや。又況んや、學校教育を受くるとを得ざるものをや。學校教育を受けつゝある間は勿論、之を卒業したる後と雖、我々勉て己自から己を教

育し、寸分だも他に越へんことを期せざるべからざるなり。若し之を勉めざらんか、即ち忽ちに人後に落ちん。察せずや、一日温習せず、一夜下調をなさざれば、忽ちに試験の點數に影響するを、而して温習と云ひ、下調と云ひ、試験の準備と云ふは、抑も何事ぞ。是己自から己を教育する事ならずや。自己教育の必要なる、此の一事を以てするも明ならずや。若し夫れ、無限の精根と熱心とを以て自からその己を教育せんか、學校教育を受けず、教場に出席すること稀れなりと雖、而かも、尙同級生に拔擢せんこと、亦決して難きにあらざるべし。學校の教育を受けつゝある間に於ても、獨學自修は斯の如く必要なり。更にその學校の門を出でたる後の事を想ひ見よ。社會は寸時も停滯するものにあらず。流水の如く、又奔馬

の如く、千轉萬化、滔々として其の止まる所を知らざるなり。學術に、人事に、亦然り。昨の定論は今の非理となる。今の公論、焉んぞ明日の私見たらざるを保せんや。學校にて得たる智識は、忽然として陳腐となり、卒爾として愚論と化することなきにあらず。若し之を知らずして、學校教育のまゝを守らんか、これ遼東の豚を抱きて、京洛に誇らんとするの業のみ。偶々以て世の嗤笑を受けんのみ。變節は尊び難しと雖、社會學術の進歩に伴はずして、後に瞠若たるは、是世に立つ所以にあらず。社會に交はる所以にあらず。抑も又立身出世、功名富貴、以て人を利し、己を益し、天下國家に盡す所以にあらざるなり。看すや、今の世に結髪を維持するは、人、以て之を笑はざるは、なく、又以て之を貶せざるは、なからん。精神、思想、技藝、

學術に於ける結髪を維持するも、亦之に同じ。是豈吾人が世に處して、巧みなるものと云ふべけんや。其こゝに陥らざらんとせば、之を如何すべき。獨學なる哉、自己教育なる哉、之に依りて新鮮の空氣を呼吸し、之に依りて新進の精神思想を養成し、又之に依りて、嶄新の學理技術を知り、而して、己の知識の欲を満足せしめ、又以て時に後れず、世と俱に進まざるべからざるにあらずや。學校教育の恩恵を受けたるものすら、斯の如く、獨學自修を必要とす。況んや、此の思想に浴することを得ざるものをや。蓋し此の種の自己教育は、人、以て困難とすと雖、然れども、余の前に説きたるが如く、總ての教育は、或る意味に於て、皆自己教育なり。小兒すら自己教育に依りて、匍ふことを學び、立

つことを知り、又歩むことを習ふならずや、通常健康の心身を有する少年、青年、備ては壯年、老年の人だもの人にして、自から己を教育し得ずと斷念するは、愚にあらずや、無智にあらずや。奮へ、諸子、總ての學術技藝は、獨學者の開拓を拒絶するが如き、狹量、偏僻、頑固、執迷のものにあらず。彼等は諸子が自から來りて、その耘すあらんことを俟ちつゝあるものなり。知らずや、凡百の學術技藝は其の初に於ては、皆獨學者の開始したるものなり。ニュートンの引力の理を知りしは、學校教育に依りてにあらずして、自己教育に依りてなり。コルバニカスの地動説を確信せしは、當時の學校僧侶の掌管せるにて教へたる所の天動説の爲にあらずして、反て己自から己を新に地動説を以て教育したればなり。アリストロ

ルは百科の學藝の祖なりと稱せらる。而かも、其の學藝の祖たりしは、先師プラトの教育と云はんよりも、己自から己を教育したる結果なりと云はざるべからず。何となれば、彼れ先師に反したる多くの説あり。己は自から己を教育したるにあらざれば、能はざる所なればなり。凡そ發明と云ひ、新學説と云ひ、新學科と云ふは、其の之を唱ふる人の自己教育の一結果なり。蓋し先輩之を教へず、他人之を唱へず、而して、己獨り之を知り、之を學び、又之を行ふは、これ明に己自から己を教育して得たるものなればなり。人若し是等は、高遠深遠の事なり、常人の企つべからざるものなりと云はんか。然らば、他の點に付て、之を云はん。人凡そ如何なる職業藝術と雖、師は唯その端緒を與ふるに過ぎざるものなり。法式を教

ふるに過ぎざるものなり。之に依りて深奥に達し、之を運用して至妙に至るは、學ぶもの、自から教へざるべからざるものなり。醫を學ぶ者を看よ、打診の法式は、師之を授けん。然れども、其の巧拙と病症の觀察力とは、之を學ぶもの自から之を己に教へざるべからず。然らば即ち、醫學の書に就て、自修自得し、而して、多くの病を觀察し、經驗し、記憶し、推理し、以て更に適合推斷する所あらんか。醫學醫術の梗概を伺ふことを得んなり。若し、其の敏捷巧知なるものあらんか。遂に一個の醫師たることを得ずと云ふべからず。賤技なりと雖、大工の如き、經具師の如き、指物師の如き、未だ曾て師に學ばずと雖、己自からの工夫發明を以て、能く其の技を爲し得るもの世間誠に少なからざるなり。更に新聞記者の如き、小説家

の如き、畫家の如き、文學者の如き、業を看よ。師に就て學びたるも多からずとせずと雖、又た然らずして、殊に社會に頭角を見はせるもの少なからず。植物學の如き、地理學の如き、金石學の如きも、亦更に師なくして、唯その好奇心に依りて、以て一家特色の學者たるものなきにあらざるなり。斯の如きは皆これ己自から己を教育したるもの、獨學自修豈難しと云ふべけんや。又豈迂遠なるものと云ふべけんや。學校の教育を受くることを得ざるものは、乃ち必ず此の獨學自修の道よりして、身を立て世に出でざるべからざるにあらずや。

四 自己教育の動機

獨學自修は、斯の如く學校教育を受けたると否とを問はず。

總ての人に必要なり。故に學校の教育は、學生に己自から己を教育せんことを欲する所以の動機を與へざるべからず。總ての教育は、或る意味に於て、皆自己教育なれば、此の動機の如き自らにして學生の心中に生すべきものなりと雖、而かも、教育者は務めて此の動機を盛ならしめざるべからず。若し此の動機弱くんば、如何なる學校教育も、恐らくは其の効を成しがたからん。況んや、初より己自から己を教育せんと欲する人に於てをや、吾人は此の動機の強弱に依りて、吾人の學業の成否を卜する事を得るなり。吾人苟も一身を學業に依りて立てんと欲せば、即ち此の獨學自修の動機を強盛にせざるべからず。否な、吾人若し自己教育の必要を感じる事深からんか、自から此の動機は動き來らざるを得ざる

べきなり。

自己教育の動機とは何ぞや、是上來の辨説に對して、讀者の必ず起し來る所の問ならん。讀者よ、余は自己教育の動機の如何なるかを説明して、以て之を盛ならしむる所以の道を示さん。

此の動機は才能を研ぎ、性格を改良せんことを欲する欲望なり。人若し此の二つの欲望を心に起し來らば、其の時よりの状態は、果して如何なるべきかを想像せよ。見る所の物、聞く所の事、將又感ずる所のもの、思ふ所のもの、一として我才能を研ぎ、性格を善ならしめんが爲の材料ならずと云ふことなけん。月を見ては我心の彼れが、多く、清明ならんことを思ひ、花を見ては我身の彼れが、如く、萬人に賞美せられんこ

とを思ひ、悪人を見ては之に倣はざらんことを欲し、賢者に遭ふては、之に倣はんことを冀ふ。二六時中、千萬の境遇事件、皆悉く學問ならざるなきに至らん。孔子の所謂我日に我身を三省する所以のものも、亦この動機の盛なればならずや。大聖の事及ぶべからずと斷念すること勿れ。匹夫も學べば聖人たるべく、賢良も研かざれば庸愚に陥らん。況んや、今日の社會は進で取るもの勝ち、退ひて取らざるもの敗れ、而して、才能を研ぎ、性格を改良するに鋭なるもの、道坦々として砥の如く、直ちに成功の京を指すものあるに於てをや。此の道の開くるあるを知らずして、初に之を斷念せんとするは、愚にあらずして何ぞ痴ならずして何ぞ

五 興味

然り而して、更に此の動機を分解すれば、性格才能に就て、吾人が二つの興味の何れかを有するに依りて、以て此の動機を起すものなり。二つの興味とは直接の興味、間接の興味、これなり。凡そ才能を研ぎ、性格を改良せんと欲するは、即ちその研磨改良に就て、何等かの興味を感ずればなり。他言を以て之を謂へば、利害得失、好惡愛憎、是非善惡の感動(即ち興味)深きものあればならずや。吾人才能を研磨せずんば、忽ちに吾人の害失たり、不善たりと感ずるは、之に就て興味を起せるなり。吾人の性格はこゝに不是あり、かしこに不善あり、我ながら之を愛せず、好まず、如何にもして之を改めずんばあるべからずと感ずるも、亦之に就て興味を起せるなり。吾人は此の興味に依りて、幾んと總ての事を決定す。學生が同じ

く學ぶべき學科ながら、數學を怠みて歴史を愛するあるは、
數學に對する興味起らずして而して、歴史に對する興味あ
ればなり。數學の利を知らず、又その愛すべき所以を解せず
して、而して、歴史の彼に適切な利害あるを知るか、若くは否
らざるも、その愛好すべきを知ればなり。政治家の政治に熱
し、小説家の想像を愛し、美術家の風物を思ひ、論文家の理論
を好むが如き、皆其の之に興味を感ずればなり。若し吾人よ
りして一切興味なるものを奪はんか、吾人の活動は一切休
止せん。否な吾人の生命も恐らくは之を保つことを得ざる
べきなり。故に若し一旦吾人が才能と性格とに就て、猛然と
して興味を起し來らんか、自己教育の動機は疾風の如くに
吹き起らずと云ふことなきなり。學生よ、獨學者よ、恒久の興

味を起し來るべし。是の立身出世、榮達幸福のプラットホ
ームなればなり。
然れどもこのプラットホームに二つの通路あり。先づ一
路より之を説かん、

六 直接興味

此の一路は直接興味と云ふ。吾人が他に目的ありて、而して、
之を愛好し、若くは之に利害を感ずるにあらずして、其の事
物、それ自身に興味を有する事これなり。譬へば吾人が美術
品に對して有する愛好の念の如き、多くはこれなり。看よ、吾
人の美術品を愛するは、之に依りて他の目的を達せんとす
るにあらずして、若し他の目的の爲に之を愛するあらば、此

は美術の翫賞にあらず、美術品それ自身に依りて、吾人を満足せしめんとするにあらずや。斯の類の興味は、多くは篤學の士、若しくは好事家に於て見はる。學問を愛するは敢て之を以て、己の職業を得、而してその收入に依りて、己の快樂(學問的ならざる)を盡さんとするにあらず。學問それ自身に存する趣味を掬するの云ふべからざる快樂あるを以て、百事を抛て専心之に向ふ。是學問それ自身に興味あればなり。富裕の人士の他に望む所あることなく、所謂道樂に學問技藝を學ぶが如き此の一なり。直接の興味に依る學問技藝も、ここに至りては、一箇の遊戲と變じ去りて、其の利益を天下に及さず。酒色の娛樂と一般、唯一人の感覺を樂ましむるものたるべく、決して稱すべからざる事なりと雖、若し此の興味

にして、こゝに陥らず、眞に學問その物を愛好し、その物の成長發達、進歩を念願し、而して更に他を顧みざるに至らんか、是その學を深からしむる所以なり。其の興味を有する人自身は、他に目的あるにあらざるべしと雖、然れども、之が爲に天下の學術を進ましむることを得ん。よし、其の人然るまでに其の學に就て發明する所なしと云ふとも、而かも、その人の學問や眞誠なるを得ん。堅實なるを得ん。更に其の深きに達すれば、その學の蘊奥に達することを得ん。なり。世界に於ける學術技藝の發明、進歩、發達を見よ。之を遂げたる人士は、皆これ學問技藝それ自身を變したるものゝみ。他に功名心あるにあらず。野心あるにあらず。學問技藝にその熱愛を捧げて、身を之に獻じたるものならざるはなし。而して、又世の

眞の學者技藝家なるものを看よ。是も亦然り。窮乏身に迫るも關せず。寒餓妻子を襲ふも顧みず。而かも無能なるにあらざれば、其の精根を以てして衣食を求むれば、求め得ざるにあらざるに、彼れ尙泰然として書冊に耽る。常人より之を見れば幾んど狂なり。伊藤仁齋が歳暮に蒸餅の資なく、妻之を訴ふるも、自若として眼書冊を離れず、靜に自己の短襖を脱して之に與へつゝ、尙且讀書を廢せざりしが如きこれなり。此の直接の興味に依りて、性格才能を研きたる仁齋その人の一生は如何ん。後世仰て以て眞誠の儒家となすにあらすや。哲學史上、萬有神教的哲學者として其の名を千載に傳ふるスピノザが、一代、日給僅に十四五錢の眼鏡研に甘んじ、而して他の大學の招聘に應せず、日夜孜孜として「レカルト

の哲學を究め、以て更に一新哲學を組織したる所以のものも、亦これ常人より見れば、幾んど狂なり。而かも、彼が哲學に對する直接の興味は、大學教授の職も、之を替へしむることを得ざりしなり。而して、後世之を稱して眞の哲學者と云はざるはなし。此の他、此の類例を求むれば、天下眞誠の學者は、多くは皆かくの如し。讀者よ、讀者にして若し眞に學者を以て、その名と、その思想とを天下後世に傳へんことを冀は、先その功名の欲望を抛ち、而して、此の直接の興味を、學問に對して、深厚ならしめざるべからず。是眞の學者たることを得る所以にして、又其の名を千載に傳ふる所以なればなり。若し夫れ、己學問に對して直接の興味を有せざることを覺らば、即ち學者を以て身を立てんことを冀ふべからず。宜し

く去つて他の業に移るべきなり。
然れども、人は自からにして知覺力を有す。知識の欲求心を有す、世界の事物に對して、之を理解せんことを欲する、所謂理性の欲望を有するものなり。殊に新奇の事物を見聞するに當りては、必ずや驚愕せざることをなし。而して、プラトリーの云へる如く、驚愕は知識の最初なれば、即ち吾人は、此の驚愕よりして、必ず少なくとも世界の事物に對して、直接の興味を起さずと云ふことなし。既に此の興味を起し來らんか、吾人は正に之を善導して、以て強盛にせざるべからず。是才能を研ぐ所以なり、性格を善ならしむる所以たるべきなり。學校教育の任に當るものは、生徒にこの興味の起りたる時を利用し、以て知識を授け、又この興味を起さしむることを勉

むべく、己自から己を教育せんと欲するものは、自己にこの興味を起さんことを勉め、又その起りたる時を逸し去らしむべからざるなり。

七 間接興味

學術、技藝、其の物に就ては、直接の興味あるにあらずと雖、他の目的を達するの手段として、之を用ゐざるべからずと覺悟し、而して之を學習せんと欲するもの、之を間接の興味と云ふ。即ち榮達のプラットホームの第二の通路なり、世間學問に従事し、事業を豫修するものを見よ、多くは皆此の通路よりするものならざるはなし。近時は宇宙の大原を冥想推尋する、超俗的なる哲學すら、之を藝業として、以て生活の目

的を達せんが爲に學ぶものなきにあらず。斯の如き哲學の修業は、眞理と純善と、至美とのそれ自身を愛好すること、聲色よりも甚だしきが爲にするにあらずして、己の生活を遂ぐる一手段として、哲學を學ぶものなり。これ間接興味に依りてなすものにあらずや。至高至純にして、無私無我（ディインテレンスツト）なるべき哲學の修行すら斯の如し。況んや、他の學術技藝をや。眞誠の學者、美術家、技藝家、又は政治家を得て、吾人一代の精神を新にし、以て社會に、學術に、人事に、百工に、百藝に、之が進歩發達を大ならしめんと欲する慾望より見れば、必ずしもその道にあらずと雖、而かも、社會千萬の人をしてこゝに至らしめんは到底能ふべきにあらず。寧ろ世界多數の人は、己の生活の目的の爲に、學問技藝を學ぶを以て、其の當然なりと云

はざるべからず。而かも、斯かる動機を以て學べるものも、其の知識藝術は、世用をなすなり。利己を目的とせる學者も、其の知識（商賣的にもせよ）を以て世の知識を増すことを得べく、同じ目的の醫者も、亦病人を治することを得べし。是其の効益は少なるべし、心事は卑しかるべしと雖、然れども、結果は公益たるを失はざるなり。況んや甚だしき貪慾利己にあらざる限りは、職業を求むるは吾人の常道なり。己の生活を目的とするも亦然り、之が爲に學問技藝に従事するも、決して耻つべき事にあらざるをや。吾人に起り來る所の間接の興味は、決して之を撲滅することを要せざるなり。否、却て之を起さんことを自から獎勵せざるべからざるなり。然れども、威權を弄せんことを欲するが爲に政治學を學び、

貧民を苦めんことを目的として經濟學を究め、毒藥を造らんことを決して藥劑學を學び、法網を抜けんが爲に法律を講ずるが如き、社會人類の害物たるべき間接の興味は、必ずや之を壓伏せざるべからず。斯の如き興味は、管に人を害するものなるのみならず、己の性格を善良にし、才能を研磨して、身を立て世に出づる所以にあらざるなり。故に吾人にして、眞誠に己自から己を教育して、以て己の性格を善良にし、才能を研磨せんと欲せんか、即ちこゝに起る興味は、間接のもの、と雖、而かも必ずや害惡を目的としたるものなるべからざるなり。

然り而して、更に吾人と世間との關係を顧みよ。吾人は世界を見て驚愕し、こゝに多少直接の興味を起す。又更に社會を

見、生活を顧みて職業を欲求するより、こゝに間接の興味を起すなり。此の二興味は如何なる人と雖、必ずや多少之を起さずと云ふことなし。愚人も尙新奇の物を見れば、その名を問ひ、その用を質し、(即ち直接の興味)而して、又生活を遂げんが爲に、何等かの業を習ふことを忘れざるにあらざるや。癡癡白痴にあらざるよりは、この二つの興味を起さずと云ふことなきは、明に世の事實の教ふる所ならずや。既にこの二興味あり、己自から才能を研究し、性格を訓練せんと欲する。己教育の動機は、夫れ既に含有せられたりと云はざる可らざるなり。嗚呼、何ぞ大に之を起して、以て又大いに自から性格才能を養成研究し、而して立身出世、榮達福利を享有せざるぞ。蓋し是等の興味は、今や學校教育に於ても、大いに注意

せる所なり。之を旺盛に興起せしめんことを勉めざるには
あらず。殊にヘルバルトの教育學の我國に傳へられてより、
最も然りとす。然れども亦自から之を起して、以て自から己
を教育せざるべからざるは、余の反覆せし所の如し。何ぞ世
人之を是れ等閑に附し去らんとするや。余は想ふ、これ世人
が自から有する所の珍寶を、自から藏匿して、以て遂に之を
朽廢せしむるものに似たりと。
然れども、余は更に深く之を思ふに、世人が斯の如く自から
所藏する珍寶を覺らざるは、未だその珍寶の如何に大いな
るかを知らざるが故なるべし。さらば余は之より、この珍寶
の吾人と世界との關係上、如何に廣大なるかを語りて、以て
更に自己教育の必要を明にせん。

八 多方の興味

吾人は元來世界に對して、八方に興味を有すべきものなり。
ヘルバルト學派の所謂多方（ニーマイオラドインテレスト）の興味は、人苟も少しく世界を
見て之に處せんと欲せば、乃ち忽ちに起り來らざるべから
ざるものなり。故に多方の興味は、常に教育者の之を學生に
起さしむることを勉むべき所なるのみならず、吾人自から
之を起さざるべからず。先試に之を想へ、吾人は事物を觀察
して、之に興味を覺えざる事ありや、小兒が花を摘み、草を集
めて戯むるゝは、是その觀察に興味を覺ゆればならずや。大
人と雖、この類の興味を有す。是ヘルバルトの所謂經驗的興
味なり。而して、吾人は單に觀察に依りて事物を知りたるの

みに満足することを得るや、多くは之に然らずと答へん。花の美しきは、唯瞥見して樂んで己まん。然れども何故に山陰北陸の諸縣は夏甚だしく熱からずして、南海畿内は之に比すれば甚だしく熱きか其の原因を推究せんことを欲するは、少しく智力あるもの、常ならずや。前者の甚だしく熱からざるは、北海より來る寒流の其の沿海を洗ふが故にして、後者の熱きは熱帶地方より來る黒潮の影響を被ふるが故なりと知りて、以て之に満足するは、即ち事物の原因を推究せんとする興味を生じ來ればなり。此の種の興味は之を推究的興味と云ふ。而して、史に又吾人は、斯の如く天地の間に於ける事物が原因結果の關係を有するは、微妙不可思議の力なり。その靈力一發して萬葉の花となり、一展して億兆の

事物となる。偉にして又美ならずやとの感なくんばあるべからず。此の情は、所謂至高の審美感なり。而かも、これ審美的興味と云ふべきもの、吾人此の情を有するに至れば、天地の偉大と萬物の美妙とを味はん。此等の興味は之を智の一方に於ける三個の興味とす。此の三個の興味あれば、その直接的なると、間接的なるとを問はず、吾人が物に對する一切の研究心は、之を自からにして起すことを得んなり。若し一旦豁然として、是等の興味の吾人と萬物との間に存するを悟らんか、乃ち己自から己の有する興味の津々たるに驚かざるはなかるべし。己自から己を教育せんと欲するの動機は、湧然として大に起り來るべきなり。故に余は云ふ、學生は經驗せよ、觀察せよ、推理せよ、而して更に其の美を掬せんとせ

よと。是物に對する興味を起す所以、自己教育の必要を一層深く感ずる所以なればなり。

更に人事に對する一例を看よ。又三個の興味、自からにして吾人に起り來るべきを知らん。知らずや、吾人の家族間の關係、朋友間、並に多くの人に對する交際の如何に我が個人の上に影響し、又如何に彼等の個人の上に關係するかを、此の個人間の關係は、或は冷々水の如くなるもあらん。然れども、多くは温情掬すべきものもあらん。少しく健全の感覺あるもの、豈この間に興味なからざらんや。之を個人的興味と云ふ。既に之あり、吾人は社會に對し、國家に對して、其の利害得失、是非、善惡の感情、思想なきことを得ざるべし。看よ、愚夫阿婦と雖、尙ほ社會の流行を云々し、國家の戰勝を祝するな

らずや。是淺しと雖、この種の興味あるなり。此の興味を社會的興味と云ふ。人事は個人と社會との二者に止まるべからず。更に廣く之を考へ看よ。天の斯の民を生じ、この國を成さしめ、而して、又他に同一の人類あらしめ、以て妙にその運命を定めしめ、禍福を配裁する所以のものは、人智未だ其の原因を視ひ得ずと雖、亦甚妙にして、亦甚だ欽仰すべきにあらずや。物質の外、無一物となす唯物論者と雖、亦物質(原子、自動子等)てふ幾んど感以上の物を提出して、世界の原因に就て云々せり。天地全体の運行、人事不可思議の運命、是豈吾人が高等の智力、並に意志の上に於て、津々たる興味あるものにあらずや。現に此の興味は、愚夫阿婦の間に、迷信的宗教の信仰として見はれ、高等の智力あるもの、間にも、亦哲學宗教

の智識信仰として見はるゝにあらすや。人事に對する興味は之を極度とす。此の興味、之を宗教的興味と云ふなり。知識にして經驗、推究、審美の三興味あり、合して六個の興味は、吾人の自からにして起し來るべきもの、之を充分に備ふれば、以て人として遺憾なきものなり。若しその端緒をだに得ば、吾人は自からその己を教育して、完全には是等の興味を全うせんと欲せざるはなかるべし。此の興味の區別は、余之をヘルバルトに借れるものなりと雖、而かも、吾人と世界との關係を明にして遺憾なきものなり。

吾人既に斯の如く、世界に對して多方の興味あるものなり。沈思せよ。この多方の興味あるべき吾人は、之を満足せしめんが爲に、己自から己の才能を研ぎ、己の性格を造らすして

可なるやを、意識せよ。覺醒せよ。吾人は家族を造らず、朋友と交らず、孤獨寥々として生活し得べきか。社會に出て、國家と關せず、一家超然として孤立し得べきか。世界の人類に對し、宇宙の萬物に對して、其の本來を尋ね、その靈妙不可思議を感せずして己むことを得るか。將又物を觀察し、推理し、感興して、更に之を尋釋せずして己むことを得るか。苟も意識あるものは、深淺は知らず、之を目的とする、手段とする、に拘はらず、皆悉く是等に對して、多少の感情思想を有せざるはなかるべし。既に之ありとす、其の興味を興奮せしめて、以て自から之を深甚廣大にせんことを欲せずと云ひ得べきか。誰か之に否なと答ふる無智無謀の勇ありや。既に之なしとせば、自己教育の必要は、天下悉く之を知りつゝあるべ

きものならずや。教育は學校のみにあらず、萬事皆學問なり。自己が自己を教育するの必要を自覺せずして可ならんや。

第三章 成效の秘訣と教育の極致

一 立身出世とは何ぞや

學に勤め業を習ふは、皆是人生一代の成效を期せんが爲なり。人生一代の成效果して何等の意義あり、如何の秘訣ありや。之を教師に問はんか、或は勤勉と云ひ、或は堅忍と云ひ、又或は剛氣と云はん、然れども是等は其部分にして全躰にあらず。現象にして精神に非ず。勤勉、堅忍、剛氣にして而かも克く成效せざる人なきに非ざるを見ば、其解釋の未だ俄に敬服すべきものに非ざるを知らん。學生の聞かんと欲する所

志士の知らんと欲する所は、蓋し別に存すべからん。

人生一代の成效、之を平易に解釋すれば、立身出生と云ふに歸せん。而して立身出世とは、已に世の耳に熟せる所、何等の奇趣なしと雖、而かも其意義や、一旦夕に解くべきに非ざる也。何ぞや其語は解し易しと雖も、其意は甚だ漠たり。其文字は平易なりと雖も、其含蓄は頗ぶる廣ければ也。

人は唯胃腑を満足せしめんが爲に生くと爲さんか。生活を遂ぐることを得る。即ち成效ならずや。而して盜賊、拘摸の徒、尙其胃の腑を空虚ならしめず。然らば彼等は成效の人か。誰か之に首肯せんや。

名を當代に博し、譽を現世に揚ぐ、人生の快事之に過ぎたるは莫し。而かも是果して人生の成效なるか。當代の盛名は往

々にして、百世の汚名たることなきに非ず。一代の毀譽必ずしも萬世の公論たらず。毒を仰ぎて死せる當時、叛逆の學究千載朽ちざるの明哲たり。十字架上の刑囚、亦以て萬代易へがたき教主たる也。人生一代の毀譽褒貶を以て、成効不成効を定む、抑も誤れりと云ふ可し。然らば名譽も亦遂に成効たらざる乎。

利は萬人の嗜む所、舉世之を追ふ也。若し肆に利を博して、以て巨萬の財力を養ひ、國家社會を擧げて、之を瞻仰せしめん乎。是人生愉快の事なり。即ち成効と云ふべからん乎。然れども利益財産は、慳吝不徳の徒尙且之を取得し、積成するならずや。而して其利の取得往々にして世の非難を受くる在るを免れず。之を成効と云は、天下貪慾の徒は皆是成効の人

たり。廉潔の人は、亦是不成効たらざるを得ず。轉倒も甚だしと云ふ可し。

生活名譽、利益(財産)、未だ必ずしも成効とす可らず。眞の成効、立身出生とは、抑も何にをか云ふ。

二人の目的

之を問はんと欲せば、人の目的の本來那邊にありやを尋ねざる可らず。其の目的に適へる事を行ふ、是即ち人の成効、立身出生なれば也。

抑も人の目的は、古來の哲人之を尋ねて、其說幽を探り玄に入り、而かも未だ眞の定論なきに似たり。然りと雖、生活は吾人の基本なり。利益財産は之を保全する所以の缺く可らざ

る保障なり。而して名譽は更に其保障を堅からしむる所以の方法なり。故に之を吾人生存の一面に於ける目的と爲すべし。而かも是等の基本保障方法には善惡の兩道、眞偽醜美の二路を混せる也。盜賊の胃の腑を滿すが如き、百世の後、汚名たるの名を得るが如き、慳吝の行爲を以て財を集むるが如き、僞惡醜の一例を行く也。吾人の生存は之を得ん、而かも永久の生存に非ず。繁昌に非ず、幸福に非ず。反て是其生存の目的を完全に成就し得る所以たらざる也。故に此三目的には即ち眞善美の三屬性を附せざるを得ざるに至る。眞善美なる生活、名譽、利益、財産を遂行取得する是之を人の目的とするに至らざる可らず。極言すれば此三屬性は三目的と分離す可らざるもの取りも直さず吾人生存の眞目的たり。

吾人生存の目的は眞たり善たり美たるに在り。是説に異同あり、論に精粗ありと雖、古來の倫理學者が宣説せる所の大眞理、中外に施して敢て戻らざるところ也。

人の目的茲に在り、此目的を遂ぐる之を立身出世と云ふべく、人生一代の成効と云ふ可し。古來成効せる人物を見れば、皆眞善美なる生活、名譽、利益、財産を全うせし也。是百世の後其人を瞻仰せしむる所以、之が全きを得ざるに、世之を成効と稱すは眞の成効に非ずして、一時の僥倖のみ、今日に於て眞に成効せんと欲するものは、一時の僥倖を恃むべけんや。

三 立身出世の種類

吾人の目的は、其生存をして眞たり善たり美たらしむるに

在り、立身出世とは、即ち此三者を以て其生存を全うする也。功名富貴は、必ずや其中に存し、顯榮利達も亦必ずや其中に在らん。若し之に反する所に於て、功名富貴、顯榮利達ありとせば、其は眞誠に非ずして虚偽なり。コペルニカスや、ニュートンや、吾人は之に對して不成功の人と云ひ得べき乎。地動の理、引力の法は、百世不易の發見なり。即ち宇宙の眞を闡明して、學理界に成效せるものならずや、之を眞に於ける成效者と云ふ。吾人若し學理の發見に於て説明に於て、又其應用に於て、例令へば小功と雖も之を立つることを得ば、是即ち彼等の迹を追へる也。而して之に停住して其生存を保つときは、即ち眞に於ける成效者たり。立身出生たることを得ん。

品行に於て群を抜き、徳義に於て衆に秀で、以て一代の師表儀範たるは、是善に於ける成效者なり。其大は即ち孔子、釋迦、基督なり。其小は吾人の間に於ける仁人君子これ也。人若し其行爲に於て、毫も他の批難を被らず、内に省みて疚しきことなきと同時に、外に施して道に戻ることなきの品行、性格を有せん乎。天地に俯仰して耻ぢざるのみならず、實に衆に信を受け、世に重きを爲す可し。是其生活、名譽利益を全うする所以に非ずや。善の一路に於ける立身出世は、即ち己を淨くするに在り、己を謹むに在り。難きが如くにして難きに非ず。身、學生の中に在りと雖、尙之を行ふことを得ん。人常に深く思ふべきに非ずや。詩歌に於て、彫塑に於て、萬代不朽の技を弄せる人、古今其數

に乏しからず。其作品の傳はると俱に、其名永く吾人の耳朶を打つ。赤人、人丸、雲慶、ミルトン、フヒデアスの如き是なり。之を美に於ける成効者と云ふべし。今日若し詩歌に、繪畫に彫塑に、音樂に、各秀づる所ありて、微なるは一町一村、顯なるは一邦數國の間に推尊せられ、以て其生存を遂ぐるの人たらん乎。是美に於ける立身出世たるを失はざる也。

成効の種類や斯の如し。亦皆眞善美の三者の外に逸すべきに非ず。夫の實業界の成効の如きは、總ての點に於て、其操行品性に關す。故に善の成効者なると同時に、其業若し科學工藝に關すれば、眞と善とに於ける成効の一、文學美術に關すれば、美に於ける成効の一たるを失はず。蓋し實業の事たる、眞善美の各事に亘る其發揮の媒介者の一たり。又之を現顯

する所以の一たれば也。

四 成効の誤解

或は誤解せるもの有り。吾人は生存を目的とす。故に利益財産を得ざる可らず。科學、文學、美術、工藝、實業の各事に就く所以のものは、之を方便手段として吾人の生存を保全する所以の利益を得んが爲めのみと云ふ是なり。然れども眞善美に離れたる生存は、僞惡醜の生活なり。貪欲非道の人は眞善美に離れたる生活を營むものなり。一時の幸榮利達は、之ありと雖、衆口の非難、後世の誹謗を免る可らず。利益をのみ目的として、眞善美を問はざるときは、茲に陥らざるを得ず。科學、文學、美術、工藝、實業を以て、唯之を利益を得る所以の方便。

に乏しからず、其作品の傳はると俱に、其名永く吾人の耳朶を打つ。赤人、人丸、雲慶、ミルトン、フヒヂアスの如き是なり。之を美に於ける成効者と云ふべし。今日若し詩歌に、繪畫に彫塑に、音樂に、各秀づる所ありて、微なるは一町一村、顯なるは一邦數國の間に推尊せられ、以て其生存を遂ぐるの人たらん乎。是美に於ける立身出世たるを失はざる也。成効の種類や斯の如し。亦皆眞善美の三者の外に逸すべきに非ず。夫の實業界の成効の如きは、總ての點に於て、其操行品性に關す、故に善の成効者なると同時に、其業若し科學工藝に關すれば、眞と善とに於ける成効の一、文學美術に關すれば、美に於ける成効の一たるを失はず。蓋し實業の事たる、眞善美の各事に亘る其發揮の媒介者の一たり。又之を現顯

する所以の一たれば也。

四 成効の誤解

或は誤解せるもの有り。吾人は生存を目的とす。故に利益(財産)を得ざる可らず。科學、文學、美術、工藝、實業の各事に就く所以のものは、之を方便手段として、吾人の生存を保全する所以の利益を得んが爲めのみと云ふ是なり。然れども眞善美に離れたる生存は、僞惡醜の生活なり。貪欲非道の人は眞善美に離れたる生活を營むものなり。一時の幸榮利達は、之ありと雖、衆口の非難、後世の誹謗を免る可らず。利益をのみ目的として、眞善美を問はざるときは、茲に陥らざるを得ず。科學、文學、美術、工藝、實業を以て、唯之を利益を得る所以の方便

手段と解せば、既に之に眞の意義を失はしめて、偽の心に陥らざるを得ず。善の意に用ゐる事あるべきも、惡の義にも亦之を用ゐることあり。又之を美ならしむることを爲すべきも、往々之を醜ならしむるも厭はざるに至る。是偽、惡、醜に行く所以たり。抑も學問、技藝、事業は生活を眞、善、美ならしむる所以の方法にして、單に利益の方便、手段にあらず。其自躰に於て各眞、善、美の屬性を具有すべきもの也。之を利益の方便手段となす、既に誤れり。

斯の如き誤解を爲すは、抑も眞實の成效を知り得ざるが故なり。眞實の成效は一時の僥倖に非ず、非道の所行を以て取得せる利益(財産)に非ず。又現世將來に誹謗を受くべき道德上缺點ある目前の榮達に非ず。之を形容して語れば、天地に

俯仰して、毫も耻づる所なく、畏るゝ所なく、而して當來二世に於て瑕瑾の打たるべきなく、光榮の汚さるべきなき生活を遂げたるもの、是なり。徒らに胃の腑の満ちたるに非ず、又實に適はざる名の高きに非ず。其知る所、云ふ所は眞、爲す所は善、而して其樂しむ所、望む所は美にして、以て之に依りて生活、利益、名譽を全うせるもの、是なり。學生之を知らずして徒らに苦慮し、志士之を覺らずして、切りに懊惱するは、誤れるの甚だしきもの也。

五 成效の秘訣

然れば則ち吾人一代の成效、其秘訣は必ずしも難解、深秘の事に非ず。則ち誠に眞、善、美を捕ふるに在る也。學問に就て之

を云はん乎。之を學校卒業の方便として學ぶ可らず。吾人に眞理を教ふるものなりと信じ、吾人は眞理を捕へざる可らずとして學ぶ可き也。而して更に進みては、吾人は眞理の發見者ならざ可らずと自信して、學ぶ可く研究す可し。若し否らずして之を唯社會に出づる通過路なり、高級の學校に入り、學士の稱號を得る所以の驛路なりとして學ばん乎。是眞理を識得せんが爲に非ず。其間僞情あり。其學ぶ所は後日恐らくは悉く忘却せん也。斯の如くにして學べるもの、後來其學問を以て立ち得べきに非ず。

實業に就て之を云はん乎。眞を失へるの實業は果して成立することを得る乎。或は一時の奇利を得ん。然れども其利永久に堅固なるを得べからず。曾て生糸を僞造して海外へ賣

出せるもの有りき。茶を粗製して貿易品となせるもの有りき。僞造粗製は固より多くの製産費用を要せざるを以て、一時の巨利は其得る所なりしや明かなり。然れども爲に我生糸製茶の信用を海外に失せり。幾んど多年拭ふ可らざるの汚名と不信用とは、我貿易商人の上に来れり。是幾何の不利ぞや。即ち永き不利、久しき害毒に非ずや。而して斯の如きに至れる所以の原因は何ぞ。眞を重せざりければならずや。虚僞の實業に用ゐる可らざるや斯の如し。

多くの例を語る事を要せず。成効の秘訣は誠に眞善美を捕ふるに在り。詳言すれば之を捕へて我物とし、我即ち眞善美たるに在る也。學校は之を吾人に捕へしめんが爲に開かれ、教育は吾人を眞善美たらしめんが爲に施さる。此學校に行

き此教育を受けて而して之を我物となす事を得ずんば、十年學窓に呻吟する所以のもの、抑も何の爲ぞや。世の成効を冀ひ、立身出世を望むものにして思ひ爰に至ることを得ず、徒らに焦心苦慮するは、抑も何等の愚ぞや。廣く世界萬象を觀察せよ。方に善惡、眞僞、醜美の紛然、混然として開展せられたるを知り得べし。吾人若し克く意を注ぎ、心を専らにして、世界萬象を觀之を撰擇するに怠らずんば、僞、醜、惡を斥けて眞、善、美を捕ふるに難かる可らず。蓋し吾人は本性若しくは經驗に因りて、黑白の判斷を誤らざる如く、眞僞を判別するの智力を有し、辛甘の感覺を認らざるが如く、醜美を斷定するの感情を有し、而して更に快不快の取捨を違へざるが如く、善惡を撰擇するの意志を有す。若し自ら

此心意に鞭撻を加へて世界に對せば、人我に教へずと雖、自からにして深く其眞、善、美を感せん。既に深く之を感ず、進で之を我物となさんば、易々の業なるを以て也。況んや學校教育ありて吾人を指導するに於てをや、而かも尙眞、善、美を捕へて我物となすことを得ず、成効するを得ざるものあるは、何故ぞ。教育者たりながら、其學生をして之を捕へて我物となすことを得ざらしむるは、抑も何故ぞ。是蓋し二者俱に教育の極致を解せざるが故なり。

六 教育の極致

教育とは人ありて、己を教ふるもの也。然れども結局は自ら己を教育する也。自から己を造る也。教育者は其教ふる所の

人をして自から其己を教へ、自から其己を造らしむるが爲に、相當の保助を爲す耳。吾人若し教育を受けて、發達すべき將成の状態なきものならば、教育者千萬の盡力も、其効空しかる可し。白痴者の如き天然心意の不具なるものは、特別の教育を加へて、辛ふじて少しく開發せしむることを得る耳。總て教育の成效する所以のものは、教へらるゝものに自からにして開發すべき將成の性質あるに因る。此將成の性質は即ち自から開發し、自から教育し、又自から造ることを得べき所以の自發力に非ずや。吾人は不具者に非ざる限り、總て此自發力を有す。宇宙六合、天地萬物、之に對して此自發力は自からにして開く可し。既に其端を開かる。自から之を用ゐ、進みて之を開かんと欲し、意を注ぎ心を専らにせば、如上

の眞、善、美の捕捉は蓋し至難の業に非ざるべし。教育者は唯或る機會を以て、之を學生に爲さしむる所以の補助者ののみ。教育の極致は、此自發力の開導に在り。此自發力を以て、自から教へ自から造らしむるに在る也。自から教ふとは、自から我に眞、善、美を教ふる也。自から造るとは、自から我を眞、善、美なる性格に造くる也。教育者此極致を解せずんば、學生を成效の途に行かしめ難く、成效を冀ふの人之を知らずんば、立身出生を得可らず。若し之を疑はゞ、既に世に成效せる人を視るべし。一時の僥倖に非ずして、永久に榮へ、萬世に輝ける成效の人の教育を想ふ可し。學校教育を受けたるものあるや論なし。先進の教導を被れるものあるや亦云ふを俟たず、少數者を除くの外

は、皆人に教へられたる人なり。然れども仔細に其一代を觀察すれば、彼等には其教へられたる以外の教育あり、授けられたる所を越へて、自から發明せる所あり、其性格の如きに至りては、超然として其教師、先進の養成以外に在る也。カントの哲學は、其師シヨルツの教へたる所のみにあらず、グラツトストンの才能は、其教へられたる『オックスホルト』大學の智識以上に出でたり。ワシントンと俱に學べる學生は、何故に彼れと同一なる成效なかりしや、フランクリンは、抑も何人の教育を以て彼れが如き成效ありしや、擧げ來れば傑人が、其教へられたる以外の性格才能ありし實例は、誠に叙説に遑なき也。是自から己を教へ自から己を造りたるに在り。下りて常人と雖同じ學校に學びて、我の人と異り、人の各

々同じからざるは何故ぞ。而かも其相異なるに依りて、各々特色あり。互に長短を爲し、而して能く世に立つことを得るは、何故ぞ。是偶然の機會を以て、各々知らず識らざるの間に、自から己を教へ、自から己れを造りたればならずや。若し之を無意の間に爲さず、自から意識して我れ我を教育し、我れ我を造り、其材料として誠に世界に於ける眞善美を以てし、之を我が腦纖維の中に織成せば、等輩に權んで、衆群を抜き、其己を高うする事を得ん。是自から教育の極致を解したるもの。成效の訣秘を得たるもの。即ち立身出世の途を妨遮する荆棘を芟除し、山野を開拓するの資格力量を得たるものと云ふ可し。

第四章 人物と自己教育

一 人物は皆自から教育す

古來歴史の上に、その名を記さるゝほどの人物の、一代を見れば、皆自からその己を教育せるもの也。信長と云ひ、秀吉と云ひ、家康と云ひ、謙信と云ひ、信玄と云ひ、之を教へて彼の如くならしめたりと云ふ著るしき師あるを聞かず。下りて清正、秀郷、忠勝、正則と云ふが如き武將も、亦之を教育したる著るしき師あることなし。而かも彼の如く史上に有名なる武將となりて、身或は匹夫より起り、或は重からざる士卒の家に出でたるにも拘はらず、天下の將軍となり、一城の主となれる、是れ抑も何によりてなるか。

固より是等は國家變亂の際に起りたるものなれば、時勢の爲に教育せられたること少なからざるべく、又境遇の斯くあらしめたることもあるべしと雖、必ずや自から己れを教育せるにあらざるよりは、焉ぞ斯の如く群雄并ひ起れるの際に當つて、獨り衆を擢くの高きに出るを得べけんや。

學問實業の事に就ても亦之と同じきことあり。伊藤仁齋、中江藤樹、荻生徂徠、二宮尊徳等の學者は、多くは獨學の人にして、錢屋五兵衛、紀ノ國屋文左衛門、淀屋辰五郎等の商人は、末路を等しくせざりしも、一代の豪商として尊むべき人物なるが、是等の人物の爾かく秀でたるも、亦人に教へられたるよりも、寧ろ自から教へて其一代の性格をなせるに由らすんばあらざる也。就中二宮尊徳の如きは、幼時苛酷なる雇主

の家において、孜孜業に勉めながら、窃に自から書を學びて、遂に日本の經濟家、實行の學者として後世尊崇せらるゝ人となれり。是れ皆人の能く知る所なり。されば人物は皆自から教育せるものにして、自から教育するは、即ち成効の道なり。故に苟も身を立て世に出でんとするものは、誰れか自から己を教育せずして可ならんや。

一 彼等を回想せよ

A Great Nation is a Nation that Produces Greatmen.

是れ嘗てピーコンスフィールド卿の唱道せし千古の格言にして、實に英國々民の氣風を證明するに餘りあるもの。蓋し大國民の大人物を生ずるは、事實の明に肯定する所にし

て、吾人は一度英國史を繙くに方り、未だ嘗て其偶然にあらざる事を感じずんばあらず。然り而して、大人物たるや、又概ね自己教育に依りて産出せられたもの也。依是觀之、大國民は、熱心なる自己教育者を生ずるの國民なりと謂ふ可し。スペンサー嘗て英國をして、今日を致さしめたるは、自己教育をなしたる人の力なりと云へり。今二三日の人物を擧げ之を説かん。

ワットは、絶代の利器蒸氣機關を發明せし稀世の偉人なり。而して、彼は實に英國スコットランドクライド河畔に於て、呱呱の聲を上げたり。

彼の家、累世數學の才に富めり。祖父は、斯學の教師として、頗る熱心に、終にプロフェツサーを以て呼ばるゝに至りたり。

父は木匠なれども、其性質甚だ善良なるが爲め、郷黨の名望を博し、曾て數年の間、市の事務に従事せり。母アグネスミューアヘッドは、亦温良敏捷を以て、世人に頌讚せられたりと云ふ。

フットは、斯の如き名譽ある家に生れ、斯の如き温良なる母の手に育てられたり。然れども、彼は不幸にして、身体甚だ虚弱長ずるも、學校に行く能はず、母之を憫み、或は鉛筆を以て紙上に書畫を習はしめ、或は白墨を用て床上に諸種の問題を記して説明し、以て聊か彼の不幸を慰めたり。彼の教育は、斯の如く不完全なりき。若し夫れ人の大事を成し、大業を成効するには、必ず規則正しき學校教育を要すとせば、彼は到底大事を成す能はざりしならん。然れども、彼は凡人にあら

ず能く天帝の眞意を知れり。心密かに其身の不幸を喜び、是れ我をして大事を成さしむる所以なりと解釋せり。徒に其無情を訴ふるの愚をなさず、自から省みて、大に奮發し、大に勉強せり。而して又書籍を以て、唯一の知識とはなさず、常に火爐の傍に静座して、鐵瓶の蒸氣に注目せり。其鳴り響く音に耳を傾け、其蓋の躍るに目を着け、時としては其口より匙の中に蒸氣を集めて凝結するを見、又其滴數を數へて、獨り喜べり。されば思慮淺き輩は、彼が爐邊に黙座し、一の爲す所なきを見て、ナマケ者と罵れり。而も彼は之を顧みずして、熱心に同一事につき熟慮するを廢せざりき。

斯の如く、彼は他人の毀譽褒貶に頓着せず、狂と呼び、愚と呼ぶの他評を耳にしはさまず、勉めて理學を研究せり。十四才

の時叔父ミューアヘッドに隨て、グラスゴウ府に出で初め
て正式に化學及び解剖學を修め、歲餘にして大に得る處あり、
傍ら郷里の文典學校に於て文典を學べり。
其他彼は種々の學科に通せり、然れども、是れ皆彼の獨學せしものなりと云ふ。

彼の知識は極めて雜駁なり、彼の教育は極めて不規則なり
き、而も彼は西曆一千七百六十九年、即ち我櫻町天皇の明和
六年、徳川十代將軍家治の時世に於て、遂に多年の素志を貫徹し、
絶代の利器蒸氣機關發明の功を全ふして、其專賣特許を得たり、
之を贊するもの曰く、

嗚呼ワットは眞に不世出の豪傑と云ふ可し、彼は考究に勇
に、失望に耐へ、其大体の目的を定むるには果敢なるも、之を

實行するに當りては、温和に且つ確實に其他人に交るには謙遜なり、
而も天稟の才は、自ら其外に現はれ、人をして畏敬し親愛し、
感服せしむ、進んでは、人世を利し、退ては學術を事とし、
而して名譽と徳望とを其一身に荷ふて、此世を去る之れ不世出の豪傑と云はざる可けんやと、蓋し溢美にあらず、
紡績機の發明家として有名なるリチャード、アークライトも、
亦英國ランカシア州プレストンに生る、家甚だ貧加ふるに十三人の兄弟あり、
彼は其末子なり、されば、素より學校に入る事能はず、幼より出で、
理髮師の許に行き、其弟子となりたり、然れども彼は非常の大志を有せり、
貧困の爲めに其意氣を挫折する如き意氣地なしにあらず、立身の望益々切
にして、年二十六のころ、初めて業を覺へ、ホルトンに行き、或

る地窖室に開店し其上に地下に理髮店あり理髮料一片との看板を掲げたり。然れども彼が不世出の功名心は長く彼をして此卑賤なる理髮業に従事するを許さざりき。即ち彼は幾何もなくして紡績機の發明に従事せり而して彼の發明に熱心なるや終に之が爲に衣食の本業を怠り赤貧洗ふが如くなれり。其妻度々之を諫むるも聽かず。妻怒りて一日機械の雛形を破碎したり。彼も亦大に怒りて之を離別せり。彼は斯の如く最愛の妻を犠牲に供するも尙ほ且つ之を成効せんと期せり。然れども恨む可し。彼は元と本職の機械師にあらず。之が爲め製作上不便を感ずること尠からず。此に於てウォリントンの時計師ジョンケーなる者を備ひ機械中の各部製作を手

傳はしめ遂に一千七百六十九年即ち我明和六年其素志を貫徹し絶代の名聲を博し英王ジョージの爲にナイトに叙せられ一千七百八十六年には撰れてダービシヤ州の知事に任せられたり。スチブソンは鐵道の發明家にして而して彼も亦英國の人なり。即ち彼はノーサンベランド州ニウカツスル府に近きワイラム村に生る。其父は毎週僅に二志(我約三圓)を得る石炭採掘場の鑛夫なりき。素より彼を學校に入るゝの資力を有せず。故に彼は七八才の頃より家を出で一寡婦エーンクローに傭はれ其牛飼となり毎日二片即ち我が四錢を受けて自活せり。然れども彼は非凡の抱負を有し又固き自信を有せり。絶代の成功を遂げて幾多偉人と比肩せん事を期せ

り。之が爲め、開あらば即ち其友サールウォールと共に機關を模造し、粘土製の釜と、矢鳩答製の瀉管を以て、常に機關の模型を作りたり。十八才の時にロビンソンコーウエンと云へる人の設立する夜學校に入り、始て讀書を習ひしに、其進歩は甚だ速かなる者ありき。之れ蓋その獨學自修の熱心なるに依らずんばあらず。かくて業の進むに従ひ、其決心は愈々強く、抱負は益々大に、野心勃々抑ゆ可からず。遂に彼は起て、發明に着手せり。然れども、天は彼に對して、飽くまでも無情なり。彼は例に依りて、例の如く、當時尙は赤貧洗ふが如く、依然黃白の爲に其銳利なる手腕を束縛せられ、英敏なる頭腦を壓迫せらる。彼は大に苦めり。大に惱めり。天は遂に彼を信せり。二人の資本家は彼の爲に、資を出す事を承諾せり。彼

の勇氣は百倍せり。其發明する所の鐵道の雛形は、忽ち出來上り、又其終に其眞物をも造り、千八百二十一年、即ち我が文政四年、スコットランド及ダリントン間に之を實施し、最初の牛飼は、鐵道發明家として、万民の欽仰を享くるに至れり。以上は其一例に過ぎざれども、又以てスペンサーの言決して、吾人を誤らざるを見るべきなり。若し猶ほ之を疑はゞ、乞ふ退て靜に英國史を繙き見よ、必ず思半に過ぐるものあらん。即ち彼の國の所謂英雄豪傑にして、苟も社會に貢獻すること大なりし者は、殆んど一人として自己教育に依りて産出せられざるなきを知るべきなり。吾人は百尺竿頭、更に一步を進め、以下聊か吾國の英雄豪傑の人と爲りに見て、以て彼等の如何に自から教育せしかを

知らんと欲す。但し此所に列擧するもの多くは所謂赴々たる武夫の事に屬するが故に、其各取る所の自己教育の態度、多く學習の側面に欠くる所ありて、却て直接に人格修養に長じ、智の修練を重せずして、却て實行的、寧ろ感情的、又意志的修養に力めたるの傾きあるを見る。之れ特に注意すべきことにして、上來掲げたる泰西の偉人が、成效せる知識的修養の例と相待て、讀者の須らく比較參考すべき所に屬す。吾人が我國偉人の自己教育法の例を引くに、多く之を不羈の英傑、豪放の俊雄の傳に借りたる所以の理、一に此に存す。何ぞ他意あらん。又何ぞ我偉人の智識界に賞すべきものなしといはんや。

(一) 徳川家康

天正十一年十二月二十六日、三州岡崎の城に生る、幼名を竹千代といふ。江戸幕府の下に、戰國群雄を統一し、以て三百年大平の基を開く。抑も家康は、夫の劔を撫し、疾視して、彼れ惡んぞ敢て我に當らん哉と云ふ的の、猪武者にあらず。豫め成敗を打算して、靜に術數を機微の間に廻らす的の英雄なり。嗚かざればなく、までまどふ郭公的の辛棒強き將軍なり。

(一) 猛將は彼の最も非認せし所

「人の一生は重き荷を負ふて遠き道を行くが如し、急ぐ可からず」とは彼れ常に近親に語りし言なり

(二) 彼は絶大の抱負を有するも、決して圭角を現さず、頗る謹慎深かりき。故に本能寺事變後、彼が呼號すべき時機は、度

々到來せしも、天下を擧げて秀吉の馬蹄に踏ましめ、勉めて謹身し、三州の田舎に潜み、密に機の熟すを待てり。彼嘗て天下の風雲を卜して曰く、

我秀吉の模様を見るに、己の才畧を以て、一世を籠絡せんとする者の如し。我若し今之に對して、才知だてを爲す時は、彼は必ず我を疑はん。然らば即ち大事なる眞我は、須らく謹慎して篤實一遍の人と思はれずんばある可らず。

又曾て子孫の爲に語て曰く、

世に大丈夫と稱せらるゝ者を見るに、一人として忍の一字を知らざるものはなし。我未だ大丈夫にあらずと雖、忍の一字を守ること久し。汝等若し我を慕ふあらば、五典九經の外、宜しく忍の一字を守らざる可らずと。

(二) 武田信玄

彼は不識庵謙信と兵を交る事前後十一年の久しきに亘り、天下の耳目を聳動せし英傑なり。試に歴史を繙かば、其大名を博したるの偶然ならざるを知るに足らん。

(一) 彼は幼時より、天下を呑むの概あり。嘗て竹千代の昔し、長禪寺に往きて書を習ふことありける頃、一日師一卷の書を出し、是れ玄惠法師が庭訓なり。讀み習ひ給ふ可しと云ふ。

二三日過ぎて後、彼は師僧に向て曰く、

這は武將のさのみ讀むべき書にあらず。他に軍術に達すべき書籍あらば、乞ふ之を見せよと。

師僧即ち替ふるに七書を以てす。彼是を見て曰く、

是れ眞に我が願ふ所の書なりと。

後來彼が武を以て天下を震動する。豈に偶然なりとせんや。彼れ或時孫子の旗四旒を造り記して曰く、

「其疾如風」「其餘如林」「侵掠如火」「不動如山」

と是れ彼の精神なり。

又曰く人は大小に依らず、身を安全に保ち得るの策、只一あり。即ちなしたき事をなさずして、嫌なる事を爲すにありと、意を用ゆる深しと云ふ可し。

(三) 上杉謙信

彼は慷慨腸を断ち、慟哭血を吐く。的の烈士にあらず。彼は實に、拔山倒海の猛力と、豪邁不撓の決心を以て、宇内を睥睨し、事に當て、一向直進、眼中人なく向ふ所敵なきの英雄なり。至誠天を動かし、丹心日を貫くの武士なり。義は千金の鼎より

も重く、信は金石よりも堅しとするの英雄なり。

四十九年夢中醉生一期榮花一杯酒との言を残せし豪放の武士なり。

(一) 彼は義を以て敵を待ちたり。

天正元年四月十四日甲州の信玄卒して喪を發せず、北條氏政、山中民部をして、私に之を彼に告げしむ。彼は箸を捨て嘆して曰く、

嗚呼我敵手を失へり。信玄は大傑にして、又實に關東の雄鎮たり。我彼と戰場に雌雄を決せんとする久し矣。而して今や即ち空し。

と泪潜然たりと、家臣信玄の死を傳聞へき、此機を幸とし、一舉して甲州へ軍扇を擧ぐべしと云ふ。彼之れを叱して曰く、

我が敵已に空し、何ぞ甲州を馬蹄にかぐるの要あらんや、
且敵の弱點に乗じて、虚を衝くが如きは、義ある武士のな
すべき事にあらず。又素より我れの快とする所にあらず
と、遂に甲州へ兵を出さざりき。眞個英雄の雅量とは、夫れ斯
の如きを云ふ乎。

又彼れの家訓なるものを見るに、曰く、

心に物なき時は、廣く、赫又泰かなり。

心に欲する時は、義理を行ふ。

心に私なき時は、疑ふ事なし。

心に驕なき時は、人を敬ふ。

心に誤りなき時は、人を畏れず。

心に邪なき時は、人を育つ。

心に貪り無き時は、人に諛ふ事なし。

心に堪忍ある時は、事を調ふ。

心に曇なき時は、胸中静なり。

心に勇ある時は、悔む事なし。

心賤しからざれば、願を好まず。

心に孝行ある時は、忠節厚し。

心に自慢なき時は、人の善を知り。

心に迷なき時は、人を咎めず。

嗚呼自から修むるの深き、聖賢と雖も、之に過ぐべからざる
ものあり。稀代の古英雄として、後人の欽仰を享くる、豈偶然
ならんや。

(四) 豊臣秀吉

木下彌助の子なり。尾張愛知郡に生る。幼名を日吉丸と云ふ。遂に海内を平げ、進んで朝鮮を征す。従一位大政大臣となり。豊臣の姓を賜り、慶長三年三月十八日薨す。年六十三。彼れは、佛國デポレオンと並び稱せらるゝ不世出の英雄なり。事を畫する密に、事を行ふ勇敢に、上に仕ふるに忠實を以てし、下を御するに恩と威とを以てす。實に眞個良將の器なり。

(一) 彼れは幼より大志あり。

八歳の時送られて郷中の光明寺に抵り、習字を學ぶ。甚だ勉めず。師僧度々之を誡む。然れども彼れは少しも改むるの意なく、却て口角沫を飛ばし、惡口して曰く、

坊主果して何者ぞや、是れ皆乞食なり。我れ安んぞ乞食と

ならんや。

と然れども彼れは妄に惡口して、以て自ら樂む惡童の類にあらず。眞に坊主に學ぶを以て、己が志となさざりしが爲なり。即ち彼れの志は、幼時已に斗牛を呑む。故に人の武を談する者あれば、夜を徹するも、猶ほ之を聞くを辭せざりと云ふ。

(二) 彼れは幼より大膽不敵なりき。

天正十二年、彼れ十六歳の時、私に郷里を出で關東に赴かんとし、途中遠州矢矧の橋上に憩ふ。會々今川義元の麾下松下加兵衛之綱通も掛り、彼れを見問て曰く、「何所の者ぞ」と彼れは先づ尾張中村の里に生れたるを答へ、且つ曰く、「武家奉公の爲め、東を指して行く者なり」と。之綱之を聞き、呵々大笑して曰く、「其男振りにて、何人が能く之を使はんや」と。彼冷然と

して曰く、抑も君は大将の器にあらず、假令己の氣に入らざるも、妄に下賤の者を罵るは、實に不屈千万、聞き捨て難し、之網其勇を愛し、又曰く、汝の言一理あり、實に面白き奴なり、乞ふ我れ之を抱へん、彼れ答へず、頻りに思案の体なり、之網怪んで聞けば、即ち曰く、今御身が身の上を考へ居るなり」と、不敵も此に至りて、極れると謂ふ可し。

(三) 彼れは正義を重んずるの士なり。嘗て一代の家訓を示して曰く、

夫れ正しき者は、假令其初は微弱なりと雖も、最後に至らば、必ず榮ふ。之に反して邪なる者は、假令其初は盛なりと雖も、最後に至らば、必ず衰ふ。人々宜しく此理を辨せざる可らずと。氣は世を蓋ふの彼れにして、尙ほ此言あり。寧ろ奇とすべし。又曰く

國病を治するに三味の妙薬あり。一に天を畏れ、二に身を修め、三に儉を守る、國治に四味の禁物あり。一に私をなす勿れ、二に邪慾を欲する勿れ、三に物に怠る勿れ、四に非義を行ふ勿れ。

と彼れは實に能く天命を知れり、勤めて天意に従て行動す。其能く天下を統一する、固より其所なり。

(五) 毛利元就

彼れは治郎小輔弘夫の子にして、幼名を松壽丸と云ふ。從四位に叙せられ、陸奥守に任じ、後山陰山陽及西海の十三州を平らげ、元龜二年六十四歳にして卒す。
(一) 彼は能く成効の秘訣を解せり。

曾て松壽丸の昔、嚴島に詣で、家臣を願て曰く、
「汝等今日何を祈りしや」と、從者君の長じて中國一圓を統
一せん事を祈願せりと答ふ。彼れ稍や色をなし、容を正ふし
て曰く、

我れの目的は、天下の王なり。我れの抱負は四海を統一せ
んとするにあり。若し夫れ汝等の言の如く、中國統一を目
的として、世に起たば、恐らく我れは蕪州一國をすら收る
能はざるべし。

と年僅かに十二にして、尙ほ且つ此意氣あり。後年中國十三
州の良將として、威を關西に專にせる。復た偶然にあらずと
云ふべし。

(六) 雲井龍雄

彼は大豪傑といはんより、寧ろ一個の奇傑といふべき人な
り。幕府將に倒れんとし、天下の風雲漸く動いて、政變革命の
氣壓次第に下り、今や暴風雨も起らんず。悽愴の間際に生れ、
山水明媚なる米澤の地に人と爲り、遂に起て東奔西走、大聲
をあげて、天下の狂瀾を回さんと呼號したれども、事志と違
ひ、泡馬山を爲すも、彼れ一時と歌ひ、空しく雄志を抱て、獄に
斬られし一個革命の鼓吹家なり。然かり、彼れや單調なる學
者先生にあらずるなり。而かも其少時能く、萬卷の書を讀破
し、椗棒を以て夜讀に疲れし頭をうちながら、講學したりき
といふ。其詳は載せて其傳にあり。亦眞面目ならざる青年學
生を戒むるに餘あり。乞ふ宜しく、彼等を回想せよ。英雄豪傑
は、固より器械的產物にあらず。又一般普通の人の企て及ぶ

べき所にあらずとすべしと雖、然れども其成效の彼れが如くなる所以に至りては、亦大に學ぶべきものあるなり。試に見よ、今舉げ來れる諸豪傑の一代は皆戰亂の中にあリ、固より教育の備はれるものありて、彼等に充分に之を施したるにはあらず。然るに、彼等は皆各々自己に修養する所あり、發明する所ありて、其身を立つる所以の道とせり。是れ皆獨學のみ、自修のみ、學問教育の力の餘り入用ならざる戰亂の間に於てすら其の如し。而して、更に徳川三百年大平の中に輩出したる人物を看よ、徂徠の如き、其少年の間に於ては、一冊の大學を反覆し得るのみ、他に學ぶべき書もなかりしと云ふにあらずや。而かも其の一冊の大學朱熹章句の獨學自修は、後來彼れをして、徳川時代の一大學者たるの名譽を得せ

しむる所以の素養たりしにあらずや。又新井白石に見よ、生きて名を成さずんば、死して閻魔王とならん。の氣慨を抱いて、夙とに發奮し、寒中水を浴びて、夜其坐讀の睡氣を醒ますを常とせしにあらずや。然らば、吾人は今飽く迄も、彼等を回想し、彼等が獨學自修の雄志に倣はざるべからざるなり。否寧ろ曰ふべし、吾人は彼等を凌駕せざる可らずと、舜何人ぞや、我何人ぞや、吾人は宜しく、此抱負を以て、世に臨まざる可らず。然るに、熟々世上を觀察すれば、之を口にする者は、甚た乏しからずと雖も、心中眞に此意氣を有する人は、實に寥々曉天の星も、晉ならず。即ち其多數は、古來の英雄豪傑又は大學者、大發明家、大事業家を以て、人間以上靈物の如く考へ、

其能力は己に先天的に之を具有せるが如く信するもの、
如し何ぞ夫れ誤れるの甚だしきや。
抑も旻天は博愛なり生れながらにして其能力に甚だしき
厚蕩ある如き偏頗の處置を以て人に生を享けしむること
あらず固より天賦の才能に自から相同じからざるものあ
るや勿論なりと雖も其の偉人と稱せらるゝは唯自ら勉め
て天賦の能力を練磨し凡人と云はるゝは其才能を研かざ
る者なり自ら勉めて練磨するが故に偉人となり大事を爲
し大業を遂げ芳名を千歳の後に傳ふ即ち偉人と非偉人言
ひ換ゆれば大人物と小人物智者と愚者の別を生じ其能力
知識に千里の差を呈する所以のものは蓋し自然に出づる
こと多からず人の自ら勉めて爲すと爲さざるとの結果な

り抑も神は自ら助くる者を助く若し勉めて怠るなくんば、
愚者も變じて智者となり小人も變じて君子となり凡人も
變じて英雄となる之に反して妄に自ら傲り敢て練磨する
所なくんば假令過分の天恵に浴する者と雖も遂に俗物と
化し草木と共に朽ち果つべし夫の英雄豪傑を見て天の豫
め指定するもの如くに考へ又は大發明大事業大發見を
以て一部人士の獨占物の如くに信じ徒に自ら卑下して小
成に安んずる者は所謂自暴自棄の徒にして自ら進て天與
の能力の開發を拒絶するのみならず會々以て自己の自信
なき事を表明するものなり其凡人となり碌々一生を終る
や實に偶然にあらず。
讀者は前項の畧傳に依り苟も名を一世に擧げ譽を万代に

其能力は己に先天的に之を具有せるが如く信するもの、
如し何ぞ夫れ誤れるの甚だしきや。
抑も旻天は博愛なり、生れながらにして、其能力に甚だしき
厚蕩ある如き、偏頗の處置を以て人に生を享けしむること
あらず。固より天賦の才能に自から相同じからざるものあ
るや勿論なりと雖も、其の偉人と稱せらるゝは、唯自ら勉め
て、天賦の能力を練磨し、凡人と云はるゝは、其才能を研かざ
る者なり。自ら勉めて練磨するが故に偉人となり、大事を爲
し、大業を遂げ、芳名を千歳の後に傳ふ。即ち偉人と非偉人、言
ひ換ゆれば、大人物と小人物、智者と愚者の別を生じ、其能力
知識に千里の差を呈する所以のものは、蓋し自然に出づる
こと多からず。人の自ら勉めて爲すと爲さざるとの結果な

り抑も、神は自ら助くる者を助く、若し勉めて怠るなくんば、
愚者も變じて智者となり、小人も變じて君子となり、凡人も
變じて英雄となる。之に反して妄に自ら傲り、敢て練磨する
所なくんば、假令過分の天恵に浴する者と雖も、遂に俗物と
化し、草木と共に朽ち果つべし。夫の英雄豪傑を見て、天の豫
め指定するものの如くに考へ、又は大發明、大事業、大發見を
以て、一部人士の獨占物の如くに信じ、徒に自ら卑下して、小
成に安んずる者は、所謂自暴自棄の徒にして、自ら進て天與
の能力の開發を拒絶するのみならず、會々以て自己の自信
なき事を表明するものなり。其凡人となり、碌々一生を終る
や、實に偶然にあらず。

讀者は前項の畧傳に依り、苟も名を一世に擧げ、譽を万代に

遺したる人々が如何に獨學に厚く、自修に熱心なりしかを、見しならん。然り、彼等は、何れも皆忠實なる獨學者なり。熱心なる自修家なり。之れ能く大事を遂げ、大名を博し、肉爛れ、骨朽るも、其芳名赫々として、日月と並び存する所以ならずや。果して然らば、英雄たり、豪傑たり、將た大發見家たり、大專業家たり、大發明家たるの道は、唯一の獨學自修、即ち吾人の所謂自教育にあるや、智者を俟て、而して後知るべきにあらず。男子生れて世に出づ、安んぞ碌々牛馬と比を同じふして、已む可けんや。須らく獨學を勉め、自修を勵み、以て彼等世の英雄に凌駕せざる可らず。王たり、侯たり、相たり、將たる、只己が欲する所、要は只自己教育にあり。嗚呼、偉人たる亦容易なる哉。

第五章 自教育の方法

〇一 間斷なき注意

自から教育するは、身を立て世に出づる所以にして、又大成を得る所以の秘訣なるは、前に説きたるが如し。然らば其方法は如何にすべきか。先づ第一には、間斷なく其學ばんとし、爲さんとする事。又は萬事に注意するにあり。西人曰く、偉大なる生活を得るの秘訣は、偉大なる生活につき、考慮思念するの習慣を養成するにありと。東人曰く、物の成るは成るの日に成るにあらずと、真なる哉。言や、大專業、大發見、大發明も、亦深く其基く所を研究する時は、極めて些細の點に導火線を有するを見ん。即ち茫々た

る蒼海を流れ來れる木片は、終に亞米利加發見の原因となり、眇たる一個の古鐵瓶は、絶代の利器蒸氣機關を産出せるにあらずや。抑も間斷なく萬事に注意するの謂は、恰もコロンパスが蒼海に浮べる木片に注目し、ワットが古鐵瓶の蒸氣に留心せしが如く、一事一物一の微と雖も、之を粗にせず、取て以て己が研究修行の材料となすにあり。若し夫れ然らん乎、目に映じ、手に觸るゝもの、一として知識ならざるはなく、學問ならざるはなし。眞個自己教育の價値は、實に此に存す。ニユートンは斯の如くにして引力の理を發明し、フランクリンは斯の如くにして電氣の應用を知り、ガリレオは斯の如くにして望遠鏡を發明し、トリセリーは斯の如くにして風雨針を造りたり。豈啻にコロンパス、ワット、ニユートン、

フランクリン、ガリレオ、トリセリーのみならんや。ナポレオンは、斯の如くにして天下を震動し、豊大閣は斯の如くにして八道を蹂躪し、徳川家康は斯の如くにして永く太平の基を開きたり。其他苟も英雄と呼ばれ、豪傑と尊稱せらるゝ人を見るに、一人として斯の如くにして見聞を廣め、斯の如くにして能力を開發せざるはなし。然り、啻に英雄豪傑に於て然るのみならず、苟も一事一業を企て、成効したる商工農等、皆然らざるはなき也。文士學者、亦然る也。即ち彼等は、人の顧みざるものにも能く注目し、人の觸れざるものにも能く觸れ、事々物々に就き、極めて精細なる觀察を下し、周到なる注意をなせるが故に、學校に行き學ぶや、能く之を解し、克く之を記憶し、家に在り市街にありても、亦其學ぶことに助け

となることを補ふ也。故に能く大事をなし、大事を遂げるなり。若し彼等にして、此觀察を欠ぎ、此注意を怠らんか、何すれぞ能く成功するを得んや。其牛馬と等しく、碌々朽廢せしや必せり。然らば即ち、英雄豪傑、又は大事業家、大發明家、大發見家の名譽の尊號は、先づ間斷なき注意に對する、社界の報酬と云ふも過言にあらず。世人曰く、機を知るは英雄なりと、豈獨り英雄に限らんや。何人と雖も、之を知るを得べし。然れども、凡人は物に接するに頗る不注意なり。事を見るや、又甚だ無意識たり。故に折角の好機も、空しく之を逸する事あり。眼前の好機は、之を見るを得ずして、常に英雄の乘する所となり。豪傑の奪ふ所となる。若し此に間斷なき注意あらば、必ずや英雄をして、獨り能く芳名を擅にせしむることあらざら

ん。社會の百事万業、皆其之に對する間斷なき注意に依りて、其秘訣を覗ひ得べく、學び得べくして、之を成就する所以の第一法は、此にある也。

二 鋭敏なる智力

苟も學に就き業を習ひ、殊に以て自から學び、獨り修めんと欲し、又大事を爲し、大業を企てんと欲せば、必ず先づ間斷なき注意あるを要することは、前項に説きたるが如し。然れども、間斷なき注意も、亦之に伴ふの智力あることなくんば、何の益する所もなき也。蓋し絶えず物に注目し、一事一物尙ほ之を苟もせずと雖、其注意せる事物を知るに、鋭敏なれば、折角の注意も無効となるべし。乃ち獨學自修の第二の必

要條件は、銳敏なる智力なり。又間斷なき注意を以て事物に接すれば、自から疑問を生ぜざるを得ず。之に對して亦銳敏なる智力を欠がんか、管に之を解くこと能はざるのみならず、己の才能を練磨し、知識を増加し、眞理を會得する能はず。終に其不快の結果、之を抛擲するに至るやも、斗る可らず。其狀恰も夫の目に一丁字なき田舎漢が、突然銀座の眞只中に佇立し、其初めや廣大に感じ、壯麗に驚き、四方をきよろく見回しつゝあるも、一度足を轉ずるや、忽ち馬車に衝突せんとし、道を誤り、方角を失し、進退終に谷まり、恐懼の余り、交番所に逃込み、警察官吏の保護に依り、辛ふじて歸國し、再び上京の念を絶つが如きに同じからん。抑も吾人は食物に依りて活動すると雖も、若し一定の運動を怠り、妄りに牛飲馬食

する時は、遂に身体の調和を欠ぎ、一身を亡ぼすが如く、間斷なき注意は、前述せしが如く、成効の母にして、苟も一事を爲し、一業を企つるに於ては、欠く可らざる秘訣に屬すると雖、若し之に相當するの智力を研かざる時は、或は成効を阻害するの恐れなしとせず。然りと雖も、し間斷なき注意を以て、終始事物の觀察に怠らざらんか、宇宙万象一として、吾が師ならざるなきなり。一事に悟り、二事に悟り、彼に問ひ、此に聽き、目に觸れ、耳に聽く者、悉く「智慧の鍵」とならざる者なかるべし。夫の古來幾多の大發明家、大發見家、即ち前項のワット、フランクリン、ニュートン、ガリレオ、トリセリーの徒を間斷なき注意家の標本として、讀者に紹介せしは、之が爲めなりとす。其間斷なき注意は、材料を捕へ、銳敏なる智力は能く之

を消化したる也。見よ、其或る者は、林檎の枝より落つるを見て、引力の理を發見せしにあらずや。又或る者は、古鉄瓶の沸騰するを見て、蒸氣機關を作りしにあらずや。其落ちたる林檎を怪み、鉄瓶の蓋の躍るを訝かるは、間斷なき注意あればなり。之を捕へて其理を推し、其眞理を明にし、發明をなせしは、鋭敏なる智力あればなり。是等は大學者の事なりとして、及ぶべからずと云ふこと勿れ。如何なる學問、如何なる事業にても、亦之と同じ。鋭敏なる智力と云ふも、必ずしも天賦のみにあらず、何人にも大に自から其心を勵まして事物を考究すれば、蓋し暫時にして之を得べけんのみ。

三 健全温和なる感情

間斷なき注意と、鋭敏なる智力とに次ぎて必要なるは、健全温和なる感情なり。蓋し感情の關する所は、頗る大にして、吾人一生の成否は、多く之が健全に依りて決せらる。學あり、識あり、且つ才ありと雖も、感情の爲に往々失敗する人物あるなり。感情に依りて成效するものは、異例たるべしと雖も、之が爲に失敗する者は、實に數ふるに遑あらざるなり。乞ふ事實を以て之を證明せん。

夫れ西郷隆盛は不世出の英雄、身を匹夫より起して、終に徳川幕府を倒し、明治政府の基を開きたり。其勳功誠に大なりと雖も、哀むべし。遂に逆賊の名を得て、城山一片の土と化し去りたり。蓋し之れ彼が感情の爲め、桐野利秋等の諸武者に動され、私學校の生徒を提げて、反旗を翻へしたるが爲なら

ずんばあらず。彼にして若し其膽量に半する健全なる感情を有したらんには、一片の憤怒か否らざれば郷黨の情誼の爲に身を誤ることなく、必ずや明治政府の功臣として、永久芳名を竹帛に垂れ、幾千万年の後に至るまで、萬民の渴仰を享けしならんを恨む可し。彼は其感情不健全なりし爲め、終に利秋等の言に動かされ、心ならずも朝敵となり、千歳の汚名をうけたるなり。

新田義貞も亦此一例なり。其異なる所は、西郷は志士に動かされ、義貞は一女子に動かされたるにあり。然れども、其失敗せしは兩者一なり。只義貞は、忠臣を以て葬むられ、隆盛は賊魁を以て終りたるの差のみ。

其他加藏清正の如き、將た明智光秀の如き、一角の驍將にし

て、而かも其死するの時や、哀むべきものあるの人を見るに、皆感情に動かしたる者たらずんばあらず。

抑も彼等は、何れも非凡の英俊にして、特に西郷隆盛の如きは、實に不生出の豪傑なり。而かも一片の感情の爲に、其進退を苟くもして、身を過れりしや、斯の如し。嗚呼、感情の勢力も亦偉大なる哉。斯の勢力に抗し、斯の禍を斥くるは、只平素感情の激動を制して、之を中和健全にするの練磨にあり。苟も一代の成效を遂げんとする者は、須らく常に此覺悟を要すべし。

史家の楠公を傳ふるや、單に其忠勇を以てす。夫れ公の忠烈は、三才の童子と雖も、尙ほ能く之を知る。今日に至りては、最早喋々之を云ふの必要を見ず。吾人は現代及び後世の史家

に向て、公が其感情に於て非凡たりし事を天下に紹介し、以て後人の軌範たらしめむ事を希望する也。見よ、初め公が、北條氏の精銳を一城の下に聚め、新田足利の輩をして、其空虚を衝て、以て渠魁を殞さしむるや、朝廷は之に酬ゆるに僅に結城親光、名和長年輩と等ふせり。其舉措を失するの大なる、誰か之に憤らざらんや、如何に忠烈なる公と雖も、豈胸中万斛の不平なからむや、而かも、公は平然として死地に入り、且つ死に臨で、最愛の子を戒め、之を國家の難に竭さしむ。其嫉妬怨恨、猜疑等、感情の激動なきこと驚くべき也。吾人は宜しく公の如き健全なる感情を學ふべき也。博學多才、世其人に乏しからず。忠勇義烈亦稀なりとなさず。而かも、能く有終の美を濟す者の甚だ少き所以は、實に感情に欠ぐる所あれば

なり。楠公の如きは然らず、靜平なる感情を有して、公事には即ち怒り、怨むことありと雖も、私身には怒らず、怨みず、淡き事水の如く、靜なること山の如くなりしと云ふべし。此點に於ては、西郷南洲の如き英雄は、即ち英雄なりと雖も、一片の私情に動く未だ以て吾人の師とするに足らず。抑も情なるものは心の狀なり、心理學者中この情を定義すること様々なりと雖、蓋し感情は快不快の外にあることなるべし。換言すれば情とは主觀即ち我が心の容態に外ならざるが如し。然り而して、之を生物進化の史上に見るに、生物が外界の條件に順應し、之が應化を遂げ、其生存を全うする所以のものは、初期段階に位せる下等のものにありては、憤怒の如き激烈の活氣を具ふる心的容態を以て、生存の戰

争を爲すにあらずんば、劣敗者となりて葬らるゝの憂なき能はざるものなりと雖も、人間の如く後期の段階に屬せる高等發達の動物に至りては、漸く社會感の如きもの發展し來り、其次第に進歩し來つて、今日の吾人の如く爲るに至れば、柔は却てよく剛を制する所以となり、怒りは寧ろ涙に如かず、厲聲は却て柔和言ふ無きに爲ることとなり、昔齒にて齒を償はしめ、目にて目を償はしめたるに反し、今は左りの頬を打たるれば、右頬をも出して之に打たしめよと教ふるに至り、さきに殺伐殘忍を以て道德としたるに反し、今は慈悲友愛を以て道德となすに至りたるが故に、感情の激烈不穩なるは、今は却て吾人の生存を危うからしむる所以となるに至りたるものなり。

然りと雖、大志あるもの決して無感覺なるべきにあらず、必ずや常に意を鋭うし、氣を壯ならしめ、感發觸發するところなかるべからざるなり。只だ或は氣鋭の少年、時に其感發する所を過まるが如きあるを恐るゝのみ、義貞隆盛の如き、以て深く鑑みるに足れり。思ふに感情は盲目なり、要は只之に明を與ふる智識の光明の、其導きを過またざるべきにあり。

四 強固なる意志

自から其己を教育せんとするには、周圍の事物に對して、斷なき注意を要し、且つ之を知るの鋭敏なる智力を研かさるべからざる事と、健全なる感情を有せざるべからざる事とは、既に之を説きたり。最後に最も之に必要なは、強固な

る意志なり、意志の強固は、必ずしも現在の成效を意味するものにはあらず、何となれば自己の意志強ければ、時としては社會の風潮に逆行し、之を擧げて敵とする場合あればなり。然れども人間の一生は、皆自己以外のものに抵抗して之に打勝たざれば、何事も遂げがたきものなれば、漸かる場合ありと雖、然れども意志は極めて強からざる可らず。古來大丈夫の事業は、皆強き意志を以て行へるものなり。時に社會を擧げて敵とするものなきにあらざるものも、大丈夫たる者は、之に屈せず、皆却て之も人生の快事となし、適ま之に依りて失敗するも、亦人生快事の一なりとせり。夫の南朝の忠臣補正成の如き、此點より云へば、失敗と云はざる可らず。然れども天下後世忠臣の鑑とせり。是れ失敗にして失敗にあ

らず。斯の如き強き意志に出づるの失敗は、吾人の寧ろ悦ぶべきものにあらずや。
抑も意志は、一身の行動を支配する命令者なり。一身の主權者なり。凡百の行動は皆其命令を意思に仰ぐ。故に意志強固ならざれば、行動軟弱にして、所謂薄志弱行となる。又若し其意志定まらざらん乎、身体は終に奔命に勞れん、何となれば、其命令する所、朝變暮改定る所なければなり。夫の婦女の手に人となれる貴公子が、勇氣なく、決斷なく、何事をも爲し得ざるは、即ち意志の薄弱なるに由るなり。
男子一生の業を爲さんとす、素より短日月の能く効を奏する所にあらず、此間素より千辛万苦あることを期せざるべからず。然るに若し意志にして薄弱ならん乎、如何にして之

に耐へ、如何にして之を遂行するを得んや。假令ば、爾かく大なる事業にあらずとせんも、意志弱ければ、即ち少しの抵抗にても挫折すべし。斯くて何事をか爲すを得べき見よ。古來の英雄豪傑、又は大事業家、大發明家が、如何に目的に忠實に、意志堅固なりしかを、爰に一の政治家を例として之を語らん。

伊國の政治家カヴールは、伊太利國をして、外國政府及び法王政府の輕轄を脱せしむるを以て、一生の事業とし、之を貫徹して、終に幾多の紛擾を斷ち、伊太利國をして獨立せしめたる英傑なり。試に歴史を繙いて、彼の外交策を見よ。其苦心の跡歷々たり。特に吾人の感賞措く能はざるは、佛帝ナポレオンとの密約なりとす。即ち彼はサルジニヤにして、埃太利

と戦ふ時は、佛蘭西は兵力を以て之を援け、事定るに及び、サルヂニヤはコロンバルヂー、ヴェニシヤを併せて、北部伊太利と爲し、羅馬を限り、法王の寺領として、其他をタスカニーに併せ、之を中部伊太利王國となし、ネーブルス王國と、三方鼎立して、伊太利聯邦を成し、法王を以て盟主とし、ナポレオン帝は、サヴォイ及ニースを得、サルヂニヤ王の幼女クロチルドを、己の從弟ゼロームナポレオンに嫁する事を密約せり。此時に於ける彼が心中は、果して如何なりしぞ。ナポレオンの深く恃むに足らざる事は、彼の屢々經驗せし所なり。故に斷然事を擧ぐるに方りては、帝の鼻息を窺はずして進行し得るの實力を供へざる可らず。之を供へんとせば、先づ内部を堅むるの必要あり。就中過激黨を利用する爲め、ガリバ

ルヂと結托せざる可らず、然れどもガルバルヂは、ナポレオンの嫌忌する所なれば、之を帝に秘せざる可らず、又ガリバルヂは、ニースの人なれば、之を佛國に附する事は、素より彼に秘せざる可らず、王女をゼロームに嫁する如きも、若し事公になるの日には、上下の反抗を受け、國內の紛擾を來すや必然なり。サヴィイ人民の如きも、事成るの曉は、佛領に屬するを以て、今の内に軍用に托し、重税を拂はしめざる可らず。斯の如き外交政略を企て、而して之に奏効したるは、豈平凡外交家の能くなす所ならむや。蓋し彼れ動かざること山の如き意志を有したるに由る。抑もカブールの社稷の臣として、万民の渴仰を享け、死して芳名を竹帛に垂れたるは、其策其略平凡ならざりしにありと雖も、主としては意志の強固

なるが爲めなり。彼れ嘗て傍人に語て曰く、我が名死し、我が名譽は他に墜つとも、伊太利にして存立せば可なりと。是れ意志の強固なる人の言ならずして何ぞや。然り意志の強固は、事業成効の最大要素なり。學に就き業を習ふ所以の基本なり。若しカブールの強き意志を學びて、自から其己れを教育するに用ひなば、他日の成業必ずや見るべきものあるべし。

夫れ意志なる者は、精神の流動力なり。隨て情性ありて、習慣を形成しやすきは、其一屬性たり。故に徳の養成、人格の修練上、意志に待つべきもの實に少々にあらざるなり。加ふるに、意志は欲望の形に於て顯はるゝものにして、欲望は生物の生命なるが故に、意志薄弱なれば、何人も到底價值多き生活

を遂ぐる能はざるものなり。求めよ、さらば與へられ、門をた
くけよ、さらば開かるゝことを得んと。西哲の言、其意深し成
効とは、換言すれば意志力のことなり。大望といひ、大志とい
ふ、亦これ意志の別名のみ、稜々たる氣骨、卓犖の志氣、一に意
志の養成、其宜しきを得て始めて成る。
然りと雖、人は單に成効に對してのみ、其意志強固なるべき
ものにあらず、必ずや、又た獨立獨行、而して獨力以て之に達
せんとするの意志なくんば、不可なり。之れ余が次章を設け
て、少しく論ずるところあらんとする所以なり。

○五 自己修練の心かけ

學校に入り、教師に従ひて學びつゝあると、又自から其己を

教育せんとしつゝあるとを問はず、間斷なき注意、鋭敏なる
智力、健全温良なる感情、並に強固なる意志なかるべからざ
る所以は、上來説く所の如し。扱て是等數者の必要條件を備
へて學問並に事務を習はんとせば、乃ち事甚だ容易に成る
べし。然れども、爰に尙ほ一つの大切なる條件あり。其は是等
の條件を具へたりとも、己れ自から己れに教授し、又己れを
訓練せんとするの心なくんばあるべからざること之なり。
學校に於て施さるゝ所の教育は、教師の教授するあり、訓練
するあれば、自己の教授訓練は、用なきが如くなり、雖も、實
際を云へば、己れ自から教授せられん、訓練を受けんとの意
なければ、決して其効なき也。是れ即ち、教師の教授訓練と云
ふと雖も、其實は自から教授し、自から訓練することなり。未

だ心意の開發なく、身体の成長せざる兒童にありては、此事固より顯著なるにあらず、全く教師の教授訓練する所のみなる觀ありと雖も、而かも多くの教育學者が説けるが如く、兒童に教育の可能性、即ち做はんとし、覺んとし、又習得し能ふ所の性能(取りも直さず自から教授し、自から訓練せんとするの意志)あるに由て、其教授訓練は成立する也。是れ亦、自からの教授訓練と云ひ得べきものならずや。學校の教育にてすら斯の如し、況んや獨り自から己れを教育するものをや、身自から己れを教へ、己れ自から其身に訓練を加へざるべからざる也。此法は如何にせば可ならん乎と問ふものあるべし、先づ二法あり、曰く、己れより進みて學藝事物を捕へて、之を知悉習

得せざれば已まず、人の教ふるを俟たず、自から之を知るに勉め、如何なる方法、如何なる時間を求めてなりとも、必ず之を爲すこと其一なり。曰く品行、道德の事は之を知ると同時に、深く己れの心に刻み付け、一舉一動、心ず之に従ふべきことを、己れ自から己れに誓ひ、而して嚴に之を行ひて、以て日夜之を復習するなり。如何なる時、如何なる事ありとも、之に違ふことなく、我れと我が身に訓へて、以て練習を重ねること之れ其二なり。此際最も必要なるは、強固の意志なり。一旦心に決定するたる事を、半途にして變更し、又は挫折するが如きことなきを期せざるべからざれば也。殊に知悉せんとして自修研鑽する場合、若しくは善事を行はんとて、之を力行するの時の如き、種々の障礙に遭ふて、爲に其意志を弱

くすることあり。古の英雄豪傑、若しくは宰相將軍は、かゝる場合に際するも、千挫不拔の意志を以て、よく百難を排したるものなり。之れ即ち自己の教授訓練、大に其効を奏したるものといふべきなり。

爰に繰り返へして、古の人傑の自から教へたることを語るは、或は煩しと云ふものあらん。然れども一事の説くべきあり。佛國の大哲學者デカルトと云へば、近世哲學の開祖なること、皆人の知る處なり。此人は、學校にありて師の教授を受けたる時、熟や學理の因て生ずる所を考へしが、學校教育の決して之を明にすべきものにあらざることを感じ、死したる學校の教授を受けんよりは、寧ろ活きたる世界を學校として、己れ自から學ぶに若かずとして、直に學校を去りて、山

水にわけ入り、異郷に遊びて、大に得るところあり。後いろいの生涯を送りながらも、常に孜々として、己れ自から己れを教育せしが、遂に大に發明する所あり。大哲學を組織し、之を公にして、後世哲學中興の祖と仰がるゝに至れり。獨り學び、自から教ふるの力、亦甚だ大ならずや。

六 讀書の必要及讀本の撰擇

人或は書を読むを以て、却て世事に疎きを致す所以なるが如く思惟し、甚しきに至ては、人生讀書憂患之始など、唱破するもの、あれども、これ寧ろ世を慨するもの、奇言のみ、深く信するに足らず。特に古代と異り、文化の駸々として進み、人々其智を争ひ、その品性の高潔を競ふに傾ける今日にあ

りては、大志あるもの須らく讀書に由りてその成效を奏す可きものなると、恰昔し兵馬の嗜み忘るれば、遂に後れを人にとらざるべからざりしと同一理なり。今形容して之をいはし、今日の「ペン」や書籍は、即ち昔日の武器に當れるものにして、提げて以て生存競争の戰場に臨むべきものなりといふべし。而して昔の武士が其武器を以て唯一の家寶となし、過けん如く、今日の紳士は、其藏書を以て唯一の珍寶となし、過去の青年が、武器によりて其武術を磨きたりし如く、現在の青年は、書籍を讀で、其修養の時期を過ごさんとするものなり。彼等の自己教育は武器により、我等の自己教育は書籍による。書籍は、自から教育する所以の一の教師にして、又一の朋友なり。故に例へば、學校に於て學ぶものと雖も、之を求む

るに方りて、十二分の撰擇を遂げざる可らず。況や獨り自から學ばんとして、而して廣く眼を萬卷の書に放ち、自から大いに學得せんとするものに於てをや、蓋し書籍の人心に及ぼす感化力は、甚だ強く、時としては、全く其人を一變する事あり。乞ふ看よ、ルソーの民約説が、如何に佛國の人民を動かせしかを、即ち之が爲め佛國民は自由平等博愛の理想を明にしたり、而かも其發動暴に失して、國內の紛擾を醸し、終に不世出の英傑ナポレオンをして、我は封建君主の權勢に反對して戰を挑み、億兆の困苦を救はんとする者なり。我は人民の役務に依りて、立つとを欲せず、寧ろ人民の同感の上に、權勢の基礎を置かんとする者なり」と宣言せしめたるにあらずや、而して其結果宗教三十年の役を経て、千六百四十

八年ウエストフアツヤの和約に依り定まりたる、歐洲列國の權力關係を顛覆せり、是れ豈嘗だ佛國のみと云はんや、餘波は引て、遂に絶東の我國に迄も及び、明治の初代幾多の志士を出したるなり。所謂民權論是れなり。一例を求むれば、植木枝盛は、土佐の志士一個の木葉漢に過ぎず、而かも彼は民權自由論を著はしたり、試に展て其はしがきなるものを見るに、

一寸御免を蒙りまして、日本の御百姓様、日本の御商人様、日本の御細工人職人様、其外士族様、御醫者様、船頭様、馬方様、獵師様、館賣様、及乳母様、新平民様、共御一統に申上まする、さてあなた方は、皆々御同様に一つの大きな寶をお持ちでござる、此大なる寶とは何んでござる歟、打出の小槌

か、錢のなる樹か、金か、銀か、珊瑚か、ダイヤモンドか、但しは別嬪の女房を云ふか、才智勝ぐれたる兒子の事か、いやいやこんなものではない、まだ是等よりも、一層尊ひ一つの寶がござる、それは即ち自由の權と申すものじや、元來あなた方の自由權利は、仲々命よりも重きものにて、自由が無ければ、生きても詮ないと申す程のものでござる、いかさま、金銀や、珠玉があるとして、折角生きてあるあなた方少しも卑屈することなく、此民權を張り、自由を伸ぶるが何よりの肝心でござらう、なせとならば幸福も、安樂も、民權を張り、自由を伸べずで得らるゝ事ではありません、さらば、これぞ今此書中には右の民權を張り、自由を伸ぶべしと云ふの一條、小子一心を込めて、書き述べたれば、あなた

方も亦一心を注ひて、御覽下さい。
と、以て如何に志士が、民權説に心酔せしかを見るべし。賴山陽の日本外史も、亦幾多勤王の士を生じたり。書籍の感化力も、亦偉大なる哉。故に書に就て、學ばんとするものは、之が撰擇を十分慎重にせざる可らず。夫れ然り、撰擇一步を誤らば、遂に身を誤り家を傷け、國家を害するに至る。然らば即ち、之を撰擇する方法は如何、吾人は之を説明するに方り、先づ讀書家の豫め決定すべき事を語らん、即ち、第一目的、第二金銭、第三時間、之れ撰擇に先んじて、必ず決定せざる可らざる問題なり。既に己が讀書する所以の目的を定め、且つ、之に仕拂ひ得べき金額、及び費消し得べきの時間を決定するは、讀書の必要條件なり。扱て之を定めたる以上は、宜しく其目的

に従ひ、その範圍に於て、書籍の撰擇をなすべし。書を讀むの前に、書を撰擇すべく、書を撰むの前に、此三條件を決定するは、是れ極めて必要にして、且つ讀書を簡便にし、又之を順序立つる所以なりとす。目的を定めて、書籍を撰擇するとは、設令へば、普通學を爲さんとするものは、普通學に關したる諸種の書籍の中にて、最も善良なるものを選びて、之を精讀するを云ふにあり。而して其以外に、心に移すが如き他の書を濫讀すべからず。専門の學を修めんとし、又は之を修めつゝあるものは、又必ず其目的のある所に隨ひて、其専門の書の中に、最も善良なるものを選び、之を熟讀すべく、決して他の蕪雜なる書籍を讀むべからず。但し普通學は如何なる専門の學科を修むるに就ても、又如何なる事業に従はんとす

るにも必ず之を修むべきものなれば、人は先づ必ず普通學に關したる書籍の善良なるものを選びて、之を讀むことを忘るべからず。殊に修身道德に關したる書は、如何なる専門學、如何なる事業に従事しつゝある間と雖も、必ず之を撰擇熟讀することを勉むべし。蓋し修身の道、道德の事は、身を立て、世に出づる所以に缺くべからざるものにして、古の人物、今の人士にして、苟も世の瞻仰する所となり、又一事一業の成効したる者は、皆是れ那邊にか、修身道德の他に秀でたる所あり、其一二事には缺くる所あるも、大体に於て世に處するの、修身道德に適ひたるものある也。之れ自から學ばんとする者の、最も勉むべき所に屬す。

金錢の事、時間の事に至りては、多く云ふの要なかるべし。苟

も書を読み、事を習ひ、理を知り、又業を修めんとするものは、之に投するの金錢を惜むべきにあらず。出來得べき丈、他の費用を節して、之に投すべきは、勿論なり。又時間の如きも、十二時中讀書に費すの暇なき人あるべからず。既に書を讀まんとす、時間を惜しむべきにあらざるは、勿論なるのみ。特に讀書に有効の時間は、閑居安棲の時にあるべきものにあらずして、忙中寸陰を惜むの間、却て多く之を見るが常なるに於てをや。

既に目的、金錢、時間の事定らば、次に最も注意すべきは、其撰むべき書籍の一般の性質のことなり。大体に於て、(一)世に信用厚き著者の書籍、(二)信用ある批評家、雜誌、新聞紙の、良好なりと許せる書籍、(三)著作の後、三年以上に及ぶも、尙ほ世に行

はる、書籍(四)現に信用ある學校に於て、教科書若しくは參考書として、用ひ居る書籍にあらざれば、決して讀むべからず、又(五)永く世の稱する所なるも、偏僻不徳の書(六)己れの修めんとする所の學業に、甚だ縁遠き書は讀むべからず。蓋し世に信用なき著者の、作れる書籍は稀れには、良好なる事もあるべけれども、概して云へば、不良なるもの多く、若しこれを讀まば、却て邪路に誘はるゝに至るの恐れあればなり。又新聞雜誌、批評家の書籍に對する批評なるものは、或は誤れることもあるべし。然れども、世に信用ある批評家、新聞雜誌等の批評は、先づ大体誤りなきもの多し、故に其良好なりと許せる書籍は、概して良書なり。之に接するは、即ち自己修養の好材ならずと云ふことなかるべし。又良書は、幾年を経る

も亡び去るものにあらず。滅し去るものにあらずして、却て千歳の後ちに至り、光輝を放つもの也。大學、論語、聖書、佛典、其他學者人傑の名著作は、二千年以上の昔に著はされたるものにして、今日猶ほ世人の尊敬し愛讀する所たり。之れに反して、今日坊間に出づる所の多くの書籍は、今日店頭に上りて、明日復た顧みる人なき有様にて、一年以上讀者の續き存するは、頗ぶる稀なり。是れ良書ならざれば也。故に三年以上も、世に愛讀さるゝ書は、多くは良書なりと云ひ得べし。最も其間甚だしく偏したるが故、若しくば、いたく亂らなるが故に、却て世の奇とする所となりて、永く存せる書もあり。斯かる書は、永存したりとても、濫りに讀むべきものに非ず。却りて務めて之を避くべし。又信用ある學校にては、良書を撰み

て、教科書、参考書とす。其撰む處のものを採りて、吾人日夕講讀の料とするは、簡便なる書籍撰擇法なり。但し、教科書は往々簡潔を主とするが故に、獨修に便ならざるものありと雖も、精讀熟考、紙背に徹するの氣根を以てせば、之れとても決して難きことにはあらず。

〇七 讀書の方法

撰擇如何に宜しきを得るも、若し其讀方にして不可なれば、折角求めし良書も、蓋し三文の價值なきに終らん。讀書の方法、豈に輕んずべけんや。いま吾人の見る所に依れば、其方法は、之を二分する事を得るが如し。即ち、一は批評的讀法にして、他は註釋的讀法なり。前者にありては、書籍を讀むに方り、

自己を主として讀み、自己を中心として、解釋する方法なり。即ち著者彼れ何者ぞや、記述する所果して誤りなき乎と、譬頭已に疑問を抱いて、讀下するものなり。かくの如くんば、讀書に従て疑問續出せん。此讀方は、進歩したる學生の事とすべき所なり。之に反して、後者は未だ讀まざるに先ち著者のいふ處、一言一句、凡て之れ金科玉條なりと心得、全く自己を空しくして讀むの法なり。未だ進歩せず、他の誘導をのみ俟つべき學生の採る所たり。

以上の二法は、果して其何れを用ふべき乎。蓋し之れ讀者の聞かんと欲する所ならん。而して吾人の亦進んで、研究せんとする所に屬す。抑も此兩者や、何れも一長一短あり。即ち前者は、單に參考の意を以て、之を見るが故に、非理を眞理と誤

解し、局端を奇抜と信ずる等、著者に誤らるゝの憂なく、且つ讀者にして、若し完全なる常識を有する時は、疑問の間、自然に真理を發見して、大に得る處ありと雖も、常識の發達、未だ不完全なる時は、常に疑問の裏に呻吟することあり。其極之を倦厭して、讀書を中絶し、斬新の論、卓抜の説も、終に之を見る能はずして終る事あり。故に、既に心意の發達して、相當の智力を備へたるもの、即ち概して青年以上の者のみ、之を採るを可とす。後者は、此弊なしと雖も、著者の記述以外に、智識を求め、新軌軸を出す能はず、加ふるに、若し不良なる著ならん乎、之に誤らるの恐れあり。故に、此讀方をなす者は、書籍の撰擇、特に必要なり。而して、此讀方は、初學者、少年の取るべき所なりとす。

之を要するに、批評的讀方は、常識の十分發達せるもの、學校系統より之を云へば、中學校卒業生以上に適すべく、註釋的讀方は、中學以下の者にして、未吸収時代にある少年輩に適すべし。然れども、前述の如く、兩者各一長一短あり、從て何れも絶體的に用ゆ可らざると同時に、又絶對的に捨つ可きにあらず。

○八 讀書の形式

讀書の形式も、亦二様あり、即ち一は默讀法にして、一は發音法なり、而して其利害に至りては、亦一長一短あり、俄に取捨を斷定する能はず。抑も默讀法に依りて、書籍を見る時は、深く著者の意を解し、之を腦裏に注入する事尠からずと雖も、

時としては、何の爲に読み、又何の爲に見つゝあるか、將た記述せし所、果して何事を意味する乎、頗る漠然として、自分ながら、之が解答に苦み、倦厭を生ずることあり。斯かる場合は、大抵腦力の非常に疲勞せるか、一種の注意に耽けれる時なりと雖も、默讀法は、多くは、斯かる場合を生せしむ、發音法は、讀んで字の如く、音を出して讀書するものなれば、書見中、別に一種の空想を生じ、之が爲に其意味を誤り、若しくは、漠然たる如き事は、極めて少なく、且つ外界の事物に、頓着せざるの利益ありと雖も、此方法に依る時は、往々精密に理解することを得ず、且つ唯音樂の如き聲のみ發して、腦底に印するものは、甚少なきことあり。蓋し音讀にありては、第一、發聲機關を使用し、第二に其發音の正否を聽き分けむが爲めに、聽

覺を働らかせざるべからざるを以て、大に熟讀吟味の、三昧境に入るをさまたぐるものあればなり、故に前者、即ち默讀法は、(一)高尚なる學理を研究する時、(二)腦力疲勞せず、精神爽快なる時、(三)外界の靜かなる時、(四)青年以上にして、精密なる事を理解し得る人に適し、後者、即ち音讀法は、(一)少年以下にして、發聲にあらざれば、書を讀み事を覺ゆるに不便なる時、(二)左して精密ならざる事を説けるの書を讀む時、(三)既に讀書に倦みて、精神の疲勞を感せし場合、(四)娛樂の爲に書を讀む場合、(五)流暢の文章にして、發聲にあらざれば、興味なき書を読む場合に適すべし、之を要するに、教育と云ふ側より見れば、概して音讀法は、少年以下の用ふべきもの、默讀法は、青年以上の用ふべきものなるが如し。

但し讀書して得る所多からんと欲せば、務めて音讀をさけ、默讀の習慣を養成せざるべからず。小兒などの、未だ聽覺の發達を要し、發聲機關の練習を要する時代に屬するものゝみ、此限りにあらずと知るべし。

九 友人

友人は、固より親にあらず。子にあらず。將た、兄弟にもあらず。親族にもあらず。唯其交はる所のみ、縁もなく、由りもなきあかの他人なり。而かも其情交に至りては、却て骨肉よりも甚だしきものあり。宜なり、人の朋友を稱して、血族的關係なき兄弟なりと云ふや。友人は、實に社交上の兄弟なり。げにや、彼れと共に樂み、共に苦み、艱難相助け、盛衰之を同ふせんとす

るも理あるかな。友人の成効は、己の成効となり。友人の失敗は、又遂に己の失敗となる。其關係や、實に密且つ接なるべき者と謂ふ可し。然れども、友人は、何所迄も他人なり。眞の兄弟にあらず。之を得ると得ざるとは、素より各人の勝手たり。友人なければとて、社交全く絶ゆるにあらず。正により義を行ふも、終に交り人を人に得ずば、吾は只知己を千載に求めむのみ。何ぞ憂悶して、天地に踟躕するの要あらんや。友人とは、知己の事なり。知己なしとて、社交を絶ち、獨り憤りを抱いて、江濱に焦瘁するは、餘りに過ぎたるの行なり。楚の臣屈原、該間の悟りを其漁夫の辭に洩らしたり。況や日進月歩、社會は次第に複雑を極むるに於てをや。若し夫れ、万一を慮り、朋友を排斥せむ乎。然らば即ち、目も蔽はざる可らず。口も閉ぢざる

可らず。將た又手足も斷たざる可らず。素より學問もなす可らざるなり。天下豈斯の如き不運の理あらんや。良友を求むるは、人間自然の慾望にして、又獨學自修に成効する所以の一秘訣なり。只注意を要すべきは、如何にして之を求むべきやにあり。

抑も良友とは如何なるを云ふか。要するに己を益するの友なり。若し之を求めんとすれば、第一に性格、第二に品行、第三に才能學識を見るべし。而して凡てに於て己より長する者を選擇し、之を友とすることを求むべき也。腦中無一物にして、徒らに放言大語する者、及び素行修まらざるの徒、若しくは才能學識なきの徒は、斷じて之を避くべし。蓋し人は如何にしても、多くの人と交はらざるべからずと雖も、能く胸

襟を開きて交はるの友は、得がたきもの也。況んや品性に於て、才能に於て、己れより優りたる人にして、己れの親友となるは、決して多くあるべからざる事なり。其間に於て、悪友は之を避け、益友は之を求めんとす。交友の道亦甚だ難い哉。然れども、眞の友人は、多きを求むべからず、又多く得べきものにあらず。友人の多きは、却て失敗の基となることあり。人は社交的動物なれば、友人は招かずして増加すべし。此際宜しく心中に於て之を二分し、一を眞の友人とし、一を假の友人となして交際すべし。蓋し假の友人とは、所謂面識若しくは、談笑の友にして、之と共に肝膽相照らすと云ふが如きものに非ず。眞の友人とは、胸襟を開きて交はり、相扶け相依るの友にして、品性に、道德に、互に相啓發するの友をいふ。所謂同

人なるもの之れなり。同人とは其理想を同ふせるもの、謂ひなり。斯の如きの友人、其一二を得れば、人は決して寂寥を感ぜざるべし。故に交友を二分するは、身を立て世に出でんとするに付て、極めて必要の事なり。然れども之を撰擇決定するに當りては、其性格、及素行等の外、尙ほ深く其の職業に注意せざる可らず。蓋し人は境遇に支配せらるゝ者にして、職業の人に及ぼす影響は、侮り難ければなり。即ち意氣あり、氣骨ある者も、職業の爲に忽ち豹變して、全く別人の觀を呈し、或は初めは品行方正にして、仰て以て模範とすべきの人も、忽然として不品行の人となることあり。是れ蓋し職業上の習慣、又は其交際の如何より、來るものにして、今の社會に免れがたきことなり。故に、友人を撰擇するに方りては、其者

の品格、性行を吟味するは、素より論なき所なりとも雖も、又之と同時に、深く其職業の如何に注意せざる可からず。假令ば人物は相當にして、左したる缺點なくも、其従事せる職業にして、厭ふべきものなる時は、之と親交を結ぶことを避くべし。斯の如くにして、眞友を作り、以て其助けを得、又彼れをも助け、互に相扶けて、研學習業に怠らすんば、乃ち身を立て世に出づることを得るや明なり。若し之に反して、友人を作るに之を撰ぶことなく、或は遊戯の友、或は酒色の友のみを求めば、己れの品性を汚し、學藝を下し、遂に世に出づる能はざるに至るべし。況んや自から其己れを教へつゝ進まんとするもの、於てをや。思ふに、書籍は無言の友にして、友は生きたる書籍なるが如し。書を撰ぶの法を知て、友を撰ぶの道

に欠けたる所あらば、人は其理想を埋没せしめられて、其成効の萌芽を出すこと能はざらん。人心猶ほ臘の如し、事物の微細と雖、一たび印せば、また消し難きものあり。慎むべきは交友の觸接にあるか。

第六章 結論

一 自教育者の缺點

夫れ一利一害は數の免れざる所にして、自教育者にも、其缺點甚だ少からず。試に其主なるものを摘録すれば、第一は普通教育の缺乏なり。第二は學識の不確實なり。第三は偏屈に陥り易く、第四は極端に馳する恐れあり。第五は執拗に成り易きなり。勿論自教育者は、皆此の缺點ありと云ふにあらず。

中には殆んど、一の缺點をも有せざる好個の丈夫を出すことあり。然れども、通じて之を觀察する時は、此等缺點ありと云はざるを得ざるものあり。

- (一) 全く學校に入らずして、自から教育する者は、學校教育の如く、普通學科を完全に修むることを得ざる場合多し。假令へば讀書に熱心たる餘り、全く体育を忘却して、終日終夜書籍にのみ親しみ、遂に身体の健康を害するに至ることあり。又例令へば、習字を怠り、算術を措き、而して他の學科に熱中し、他日世に出てたる時、筆算に拙なるが爲に、大なる不便を感ずることあるが如き、往々獨學者の免れがたき所なりとす。
- (二) 全くの獨學者は、自己一心の判斷を以て、事物の理を定む

るが故に、往々社會普通の判斷に違ふことあり、即ち臆斷誤解を免れがたし。故に全くの獨學者は、屢ば世間の學者、識者と接近して、自己の學ぶ所、解する所の果して臆斷誤解ならざるや否やを、自から檢定することを勉めざるべからず。之を勉めざれば、所謂固陋の弊に陥るべし。

(三) 獨學者は、不規則なる學問をなすことを免れがたし。故に圓滿を缺ぎ、偏屈に陥り易し。

(四) 獨學者は、往々極端に馳するの弊あり。蓋し獨學者の修むる所の知識は、先輩の誘導するありて、以て之を調和せしむることなれば、其自然の結果として、往々思想、行爲共に、極端に馳することあり。極端なる事必ずしも、悉く不良なるにはあらずと雖も、社會的事業には、適當せざる也。獨學の人傑が、

往々排社會的思想、行爲あるは、之が爲め也。

五) 獨學の人は、自信強し、自信強き者は、即ち容易に其感情を他に移さず、容易に他に移らざるが故に、往々執拗に陥るもの也。蓋し極端と執拗とは、世人の動もすれば混同する所なれども、全く異れり。即ち極端は多くは意志より出で、執拗は概ね感情より發す。廣く獨學者を觀察するに、或る一部の人を除くの外、凡て執拗なるを免れず。物を議し事を論ずるに際し、自説の誤りあるを知るも、尙ほ且つ固く執りて動かす。動もすれば、傲慢に流れ、不遜に亘り、人をして嫌惡の念を生せしむることあり。

獨學者には、斯の如き多くの缺點ありと雖も、若し夫れ之が長所を擧ぐる時は、第一章以來反覆するが如く、之に數倍す

るものあり。況んや其缺點たる之を補足すること敢て難からざるに於てをや。

本項の終に臨んで一言を要すべきは卑屈なる獨學者の事なり。夫れ偏屈極端執拗是皆或方面より觀察する時は自主傲慢を意味す。而して獨學者に此缺點あるは前述せるが如し。然らば即ち敢て卑屈を云々するの必要を見ざるが如し。蓋し卑屈と傲慢は決して一致すべきものにあらず。己に傲慢なる以上は卑屈ならざる事は言を俟たざればなり。半面傲慢にして半面卑屈なる者の如きは假令へ求めんとすも得可らず。吾人は獨學者の大部分を目して卑屈にあらず。卑屈なるべからざるものなりと斷言するに憚らず。然れども數多き獨學者の中には夫の學校教育の恃む可らざるを

慨し自ら進んで獨學自修するの意氣天を衝くが如きもの外尙は赤貧洗ふが如し敢て學校教育の恃むに足らざるを慨したるにもあらず。否啻に之を慨せざるのみならず大に學校を尊重し如何にもして之に入學せんと欲しつゝありと雖も其事叶はず。又は止むことなき事情の爲めに余儀なく中途より退學し恨を呑んで自から學び自から修めつゝある可憐學生あり。吾人の卑屈なる獨者學と云ふは實に此種の者なり。

是等の獨學者は已に初めよりして自教育を誤解したる者なり。獨學にては學業を遂げがたしと誤想し古來苟も一業一業を爲したる人の皆自から教へたるものなることを知らざるもの也。從て自信なく見識なく博士學士を見れば神

の如くに信じ、鬼の如くに恐れ、彼等の云ふ所は、一言一句、凡て之れ金科玉條と心得、真理と断定す、故に己の説を立て、事を盡するに當りては、徒らに標準を彼等に取り、真理と、大業とは、別に存するものなることを知らず、誠に憐むべき也、斯の如き欠點は、獨學の弊中、最も甚だしきものにして、苟も自から己を教育せんとするもの、勉めて避くべき所なり。

(二) 其補足

獨學の欠點や斯の如し、獨り自から教へんとするものは、先づ必ず此弊に陥るなきことを勉めざるべからず、而して之を勉むるの方法は、如何にすべきか。

(一) 獨學せんとするものは、第一に普通學科を修むることを

怠るべからず、最も初學の人にありては、修身、國語、漢文、歴史、地理、數學、博物、物理、化學、習字、圖畫、体操の諸科を學ぶことを勉むべし、是等を學ぶに就て要する書籍は、多くは教科書を用ふるを良しとす、初等、中等の諸教科書、讀本の類これなり、而して是等は前にも云ふが如く、現に信用ある小學校、中學校にて用ひつゝ、ある教科書を良とす、最も体操の一科は書籍に依りては、學びがたきものあり、然れども体操の理を説ける書籍あり、之に依りて學び得られざるにあらず、又圖畫も、獨修には不便なるものなり、然れども畫は元と實物を寫すに始れるものなれば、圖畫の教科書に依りて、徐に自から工夫して學ばゞ、學び得られざるにあらず、概して普通學は獨學に困難なり、然れども之れ實に、總べての學問事業の基

礎なれば苟も獨學自修して、身を立て、世に出でんとすとするものは、此の困難に打勝ち、先づ其の基礎を築かざるべからず。但し全くの獨學者は、是等の普通學科を、完全に修むる能はざる事情あれば、萬已むことを得ざる場合に於いては、圖書のごとき、之を省くも據所なかるべし。而かも修身の書國語、漢文、數學、歴史、地理、物理の學科は、必ず之を欠くべからず。

(二) 獨學者は、折々その自己の學べる所と、同程度なる學校を參觀し、若しくは其生徒に交際して、以て自己の解せる所、信せる所の果して世の學者と同一なるや、否やを試む可し。而して己れに誤りあるか、己れ劣等なるか、將又、謬信あるかを發見せば、速に之を改むることを工夫すべし。

嘗に之を工夫するのみならず、更に彼等學校生徒を凌駕して、之に勝れんことを工夫せざるべからず。若し又是等の學校、并に生徒も參觀交際するの便なき時は、或は知人を介し、又は新聞雜誌に依りてなりとも、其程度を覗ひ、之に劣るなきことを期するのみならず、更に勝らんことを勉むべし。固より、こは頗ぶる困難なる事なり、然れども人は元來自から學ひ、自から教ふるにあらざれば、人となることを得ざるもの也。學問事業に成效せざるもの也。困難と云は、此自から學ひ、自から教ふることを、即ち獨學なるもの既に困難なり。而して人生は總て困難に打ち勝ちて、始めて成效を見るべきものなれば、斯かる困難は、學生として、必ず冒さるべからざるもの、例へば、學校に入りて學ぶものと雖も、亦之を冒

すの覺悟なかるべからず。

中學以上の學科若しくは諸專門學科を獨修するものに於ても亦這般の覺悟なかるべからず。獨學の固陋に陥ると云はるゝ所以のものは、世上一般の學理學說に頓着せずして、己れ獨り別に學ぶが故に由る。隨て學者社會の進度と異なるに至るを以て也。故にこゝに陥らざらんとせば、勉めて他の學者を見ざるべからず。世の學說の狀態を覗ひ、自己の思想知識と比較し、以て正否を考へざるべからざるなり。

(三)獨學の弊は、動もすれば、不規則に流るゝにあり。隨て其修むる所圓滿なるを得がたし、是れ大なる過失なれば、先づ出來得べき丈け學習の課目、時間を規則立てざるべからず。自から己れの舉動、行爲に對する憲法を作り、職業休息、學習の

時間を定め、之を勵行するが如き、最も良かるべし。斯かる憲法を設くるは、常に外面の行爲に於てのみならず、内部の心意上に於ても、亦甚た必要なり。例令へば猜疑、嫉妬、憤怒、怨恨等の心は、必ず之を起すべからず。常に正善、温和、博愛、慈善の思想、感情を有し、之を心意の中より放つべからずと定め置き、念々之を忘れざらんことを期するが如き是れ也。斯の如くにせば、身心共に自から開發して、圓滿に近づき、恐らくは偏狹に陥らざるべし。

(四)全くの獨學は先輩の誘導なく、隨て調和を得たる知識を得ること能はずして、却て極端に馳するものなれば、之を救ふが爲に、獨學者は、一學說一學理をのみ、偏信することを避け、及ぶべき丈け、廣く諸學者の意見説明を見るべし。蓋し學

說、學理若しくは事業につきては少なくとも、二說又三說の相反對せるものあるを常とす、其一方をのみ信するは、往々極端に馳するものなれば、他の一方の說をも覗ひ、又今の多くの學者は、何れを是として承認し居るやも探ぐるべし。之れは普通學科の上には餘り之なきことなれども、苟も斯かる用意なくして、獨り學ぶときは動もすれば、極端なる偏說を信するの恐れあり、獨學者の廣き注意、厚き用意を要するは、通常師に就て、學ぶものよりも大なりと云ふべし。

學校に入りて、教師の誘道教授を受くるものと雖も、亦之れと同様の用意なくては、往々偏狹に陥るべし。

(五) 終りに獨學者の最も注意すべきは、自から己れの誤謬を正すことを勉むるにあり、師に就て學ぶものも、素より自か

ら教ふる所なかるべからず、又自から誤謬を正すことなかるべからずと雖も、師其誤謬を匡正し呉るるの便あり、獨學者は此便を有せざるものなれば、一層奮つて自ら己れの思想、感情、知識、并に行爲の正誤を爲し、其改良に勉めざるべからず、之に勉むるには、先づ世の學校教育を受けて、正當の順序を踏み、一般の許して學者とし、人物とし、若しくは道德家とする所の人と、己れとを比較し、又は書籍の上に残れる、古の人物の思想、感情、知識、並に行爲と己れのとを比較し、靜かに反省するにあり、一點にても、己れの誤れる所あるを、發見するに勉め、若し果して之あらば、即ち直ちに、之を改むるに吝なるべからず、己れ自から刻苦して、知り得たること、覗ひ得たること、若しくは想ひ浮びたることは、自から信するも、

亦厚きものなれば、之を捨つるに忍びざるものあるべし。然れども、既に反省して、誤れりと知らば、執拗に之を守るは不徳なり。過罪なり、速に自から之を正誤することを勉め、又常に勉めんことを思ふべし。而して、之を正誤するに忍びざる愛情の如きは、斷して之を壓伏すべき也。斯くの如くせば、以て、獨學者の陥り易き、執拗の如きは、之を除くことを得るや明なり。

三 自教育者の長所

自教育者に缺點あり、其補足として前項の用意を要するが故に、自から教育するは、他に教育せらるゝよりも、甚だしく劣れるものなりと、想ふものあるべし。是れ誤れる事なり、勿

論獨學は種々の不便あるものなりと雖も、獨學者とは、他に得られざる長所ある也。今之を左に説くべし。

(一) 自教育者は、其修むる所に深刻なり、是れ自から其學ぶことを好み、之に自から進み、自から勉むることを得れば、即ち遂に之に深きことを得るに由る也。凡そ古來の學者にして、自から教へたるものは、其學識深さを常とす。

(二) 獨り學べるものは、頗ふる自信に富めり、是れ他人に依頼して、學習せるにあらずして、自から刻苦勉勵して、得たる所なるを以て也。英國の哲學者にて、ホッブズと云へる有名なる人は、我れ若し他の學者の如く、多くの書を読みたらば、恐らくは無學となりしならんと云へり。蓋しホッブズは、唯古來の典籍をのみ涉獵して、更に己自一己の説を立つること

を知らざる、當時の學者を卑み、多讀涉獵の、獨り自から沈思考究するに劣れること、即ち獨學獨創の尊ぶべきを云へる也。斯の如く多讀涉獵を排せるは、堅固の自信なれば也。斯かる自信力は多く獨學の人に富む。

(三) 自から己を教へたるものは獨立せり、何となれば師なきが故に、其思想自由にして、更に束縛依頼の事なく、古來の定説と雖も之に屈伏することなきを得れば也。荻生徂徠は、自から學べる人、同時代の學者が、毫も心付かざる古文學の研究に勉め、敢て朱子派の説にのみ屈伏せずして、獨り自から説を立てたり、我國明治以前の學者が、常に支那の學者の迹のみを追ひ、就中朱子派の説に屈伏して、更に新見を立つことを得ざるの間にありて、徂徠の如きは、誠に賞するに耐へ

たり。是れ即ち獨學の自由にして、束縛依頼のことなく、獨立の見を立て得るに因る。

(四) 獨學の人は堅忍に富めり、百難重り至るも恐れず、万難襲ひ來るも惑はず、能く其所志を貫くは、獨學の人の常なり、伊藤仁齋、歳暮に當りて机に向ひ、致々として書を読む、妻其子の爲めに歳末の餅を造くる能はざるを訴ふるや、平然として、その着せる所の羽織を脱して之に與へ、毫も言を發することなくして、復た讀書を續けたりと云ふ。自から學ぶの人は、自から進み、自から奮ふて學ぶなり、其他を顧みずして、専心之に向ひ、而して之に依りて成效する也。

(五) 自教育者には進歩あり、蓋し學校教育には卒業あり、自教育には卒業なるものなし、前者に於ける卒業證書は、教育の

停止若しくは禁止にあり、爾來進みて、教育せらるゝとなきもの多しとす、之に反して後者は限界なし、且つ學校卒業の後、之に代りて教育することを得るものなり、故に自から教へんとする意志だに撓むことなくば、終生續けらるべし。一代の間、教育を續くるは即ち進歩を續くる也、ニユートンが林檎の地上に落つるを見て、其理を考へたるは、更に自から眞理に教育せられんとてなり、之に依りて引力の理法を發見したるは、即ち進歩にして、又實に其自教育に勉めたる結果なりと云ふべし。蓋し、ニユートンにして、其理を考ふることをなさず、從來の教育にて解したるまゝに満足し、更に自から啓發して、新なる眞理を知らんことを欲せずんば、此進歩なきならん、而して自から啓發するは、自から教育する

ものなれば、即ち自教育は進歩の本原なりと云ふべき也。
 (六) 自教育の効果は大なり、學校教育を受けたりと否とを問はず、自から教育したる者は、其立身出生大なりと雖も、否らざるものは、碌々として大に世に出づることを得ず、前にも説きたるが如き、同じ學校に入り、同じ教育を受け、同じく卒業したるものにて、自から其己を教育するに勉めたる者は、大なる成效ありと雖も、否らざるものは、少しも世に顯はるゝことを得ず、グラッドストーン、ヂズレトと共に、イートン、ヤオツクスホルトの學校に學びたる徒輩多しと雖も、二人の如く、大に世に顯はれたるは、少なし、カントと共に、コニグスベルヒの大學に學びたる學生は、甚だ多かりしと雖も、カントが、自から哲學を己れ自身に、修養せるの効は、遂に其

身同輩を抜きんでて、天下の仰ぐ所となれり。此他全くの獨學者の如きも、其効果學校教育のみに満足せるものに越へたり。即ちフランクリンの如きあり、リンコルンの如きあり、皆天下の仰ぐ所ならざるはなし、而して之を今の世に徴するも、當代一個の名士たり、一事の成効者たるものは、皆是れ學校に學びたるのみにはあらず、大に自から其己れを教育したるもの也。是れ必ずしも類例を引くを要せず、讀者少しく、世上の人物の身心二者の經歷に注意せば、蓋し明らかなるべし。自己教育これ爲すあらんとするもの、採るところなり。

立志身 獨學自修策 終

明治卅五年五月十六日印刷
明治卅五年五月二十日發行

(自修策奥付)

定價貳拾錢

著作者

久津見息忠

發行者

伊原眞次郎

印刷者

三島宇一郎



發行所

東京市神田區西小川町二丁目一番地

(電話本局三〇五〇番)

三

育舍

大賣捌所

東京市神田區小川町九番地

(電話本局三四二〇番)

開

發社

三育舎出版書目

鹽井正男著

小學農業教科書

全四冊

定價 一、二十八錢
三、二十二錢
四、二十五錢

東京帝國大學農科大學教授 農學博士鹽井時敬校閱
實業教育學科課程並設備調查委員 岡田九之吉
東京帝國農科大學農業教員養成所 中曾根三郎合著

初等農業學校訓練法

全一冊

定價金三十五錢
郵税金六錢

東京帝國大學教授文學博士元良勇次郎君序
久津見息忠著

四兒童研究

全一冊

定價金六十錢
郵税金六錢

全實用小教育學

全一冊

定價金三十錢
郵税金四錢

26/8/36

東京高等師範學校教授谷本富序
東京府師範學校教諭立柄教後譯述
サステル
ウエツヒ

全教育要義

全一冊

定價金二十五錢
郵税金四錢

ヘルバルト
チルレルト

派教授學

全一冊

定價金二十五錢
郵税金二錢

日本教育協會編纂
新令實用國語教授法

全一冊

定價金十八錢
郵税金二錢

東京高等師範學校訓導石原和三郎
東京高等師範學校訓導富永岩太郎
東京高等師範學校訓導近藤胤保合著

實小學珠算新書

全一冊

定價金四十五錢
郵税金八錢

成城學校教官高橋兼吉編

中等暗射地圖

全廿枚

定價金二十錢
郵税金四錢

文學博士井上圓了先生講解

教育勅語略解

全一冊

定價金九錢
郵税金二錢

三